

基幹研究「人類学におけるミクローマクロ系の連関」

二〇一五年度 公開シンポジウム

床呂郁哉編

「顔と身体表現に基づく異文化理解」

日時 二〇一五年十二月三日（日） 一五：〇〇～一九：〇〇

場所 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）

三階大会議室（三〇三号室）

基幹研究「人類学におけるミクローマクロ系の連関」

二〇一五年度 公開シンポジウム

顔と身体表現に基づく異文化理解

司会 床呂郁哉（東京外国語大学AA研）

I 開会の辞 西井涼子（東京外国語大学AA研）

II 趣旨説明 床呂郁哉（東京外国語大学AA研）

III 報告

1 「文化への熟達過程を知る」

山口 真美（中央大学）

2 「顔認識の多様性―東アジアと欧米を比較して」

ロベルト・カルガラ（フリブール大学）

渡邊 克巳（早稲田大学）

3 「仮面から考える顔の文化論にむけて

―バリ島仮面劇トペンの事例から―

吉田ゆか子（国立民族学博物館・日本学術振興会）

4 「顔の不在がもたらすこと

―ムスリム女性のヴェール着用をめぐること―

西井 涼子（東京外国語大学AA研）

63

48

29

13

3

1

IV コメント

原島 博（東京大学）

北山 晴一（立教大学）

金沢 創（日本女子大学）

V デイスクッション

基幹研究「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」とは

111

101

96

86

81

(床呂) それでは、これよりシンポジウム「顔と身体表現に基づく異文化理解」を始めさせていただきます。私は司会進行を務めさせていただきます東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研)の床呂と申します。よろしくお願いいたします。

開会に先立ちまして、AA研の基幹研究人類学班代表者の西井から一言ごあいさつをさせていただきます。西井さん、よろしくお願いたします。

I 開会の辞

西井 凉子 (東京外国語大学AA研)

皆さま、本日は足元の悪い中、また東京のこの不便なところまでわざわざお越しいただきまして、本当にありがとうございます。私たちのグループは東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の基幹研究人類学班とありますが、簡単にご紹介だけさせていただきます。

アジア・アフリカ言語文化研究所は、人類学と歴史学、今は地域研究と言っていますが、それから言語学、この三つの分野から成る研究者、現在四〇人弱のスタッフが集まっている研究所です。六年ほど前から、何かこのAA研の顔になるような研究をそれぞれの分野で何か考えようということになり、人類学においては「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」という、実は何でもできるようなタイトルですが、このもとでずっとシンポジウムや研究会等を積み重ねてやってきました。

第一期が三年で終わりました、今年が第二期の三年目、最後の年になります。今回は床呂さんが心理学の山口真美先生などと相談して、非常に面白いシンポジウムを企画していただ



きました。私たちとしても「顔と身体表現に基づく異文化理解」は、人類学の方だけではないような非常に刺激的な面白いシンポジウムになるのではないかと思つてとても楽しみにしています。

今日は三時間半、最長四時間ですが、どうぞ最後までお付き合いいただければと思います。どうもありがとうございます。

(床呂) 冊子のことはよろしいですか。

(西井) そうです。それで、基幹研究人類学班で去年から始めた試みですが、こうした大きなシンポジウムや研究会があつたときに、記録を取つて、そのテープ起こしをして冊子にすることをしています。今、後ろの方で持っているのは、昨年、川村伸秀先生をお呼びしてやつた合評会形式のシンポジウムの記録です。あのような形で、実は本日のもも記録して冊子にしたいと思っています。よろしければ、後ろに置いておきますのでご自由にお持ちください。今回の報告書も希望があれば、事務局にお知らせいただければまた後ほど送付させていただきます。

では、床呂さんにまたマイクを返します。

II 趣旨説明

床呂 郁哉（東京外国語大学 A A 研）

西井さん、どうもありがとうございます。それでは、引き続きまして、私から簡単に今回のシンポジウムの趣旨説明をさせていただきますだけだと思います。

（以下スライド併用）

#2（以下#はスライド番号）

今回、「顔と身体表現に基づく異文化理解」というタイトルで始めていますが、これはごく簡単に申しますと、「顔と身体表現」と文化との関係に関する、ある種の学際的な共同研究に向けた、このシンポジウム自体が一つの試みであるということです。

それで、実は文科省・学振の科学研究費の、新領域の方でやはり「顔と身体表現」と文化の関係に関するプロジェクトに応募を既にさせていただいています。その科研の研究の中でも、今日のシンポジウムと同じように、山口先生らを中心として、心理学、認知科学、そしてわれわれ人類学の共同研究、ジョイントプロジェクトという形で進めています。

顔や身体表現をめぐる研究というのは、恐らく心理学・認知科学、後ほど山口先生からも詳しいご説明があるかと思いますが、一方では、文化を超えて非常に人間に共通するような共通性や普遍性、人類学でしばしば「ヒューマン・ユニバーサル」という言葉を使いますが、そういう側面を持っています。ただ同時に、他方では文化的な文脈、もしくは社会的な状況といった文脈に固有の側面、人類学で言う文化相対性や文脈依存性、文化依存性とい



う両方の側面が共存するという研究領域・研究対象であろうと考えられます。

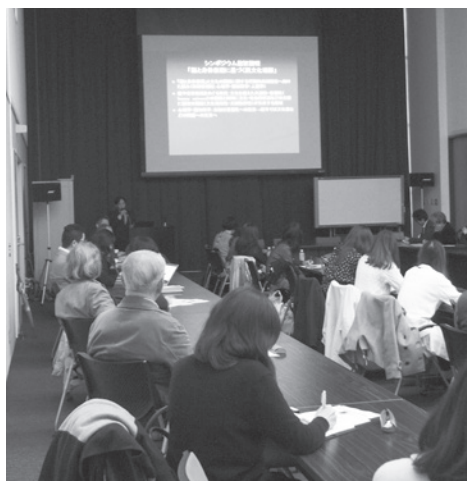
心理学、認知科学に関しては、山口真美先生（中央大学）、ロベルト・カルダラ先生（フールブル大学）、渡邊克巳先生（早稲田大学）から後ほどまた詳しいお話があるかと思いますが、当初はどちらかというところと普遍性の側面への注目から出発して、近年では、今回のシンポジウムのテーマのように、文化ごとの違いというような、より細かな文脈へも注目が集まっているということです。

これに対して人類学に目を転じますと、人類学と一口に申しましても、生物系のいわゆる形質人類学や先史人類学の分野と、われわれのような文化人類学では若干ニュアンスが違う面もありますが、やはりその普遍性と特殊性の双方といえますか、一方ではホモ・サピエンスとしての普遍性の側面にも注目する。同時に、特にわれわれのやっている文化人類学の領域では、文化・社会的な文脈に応じた、例えば顔や身体表現の多様性や、その基盤となる感情・情動自体の文化依存性や文化相対性という問題意識にも立って研究を進めてきました。今回はそのようなことを踏まえて、顔や身体表現とその文化との関係に関する心理学・認知科学・人類学を含む、学際的な一つの問題提起の試みであると言えるかと思えます。

#3

もう一度、学説史的な部分におさらいも兼ねてということで、簡単にお話ししたいと思えます。ここから先のことは、実は山口先生が最近出された著書のほとんど受け売りですので、不正確な部分があれば、後で山口先生にご訂正いただければと思うのですが（山口真美『顔を忘れるフツツの人、瞬時に覚える一流の人』中公新書ラクレ、二〇一五年）。

まず、その普遍性という事で言いますと、「ヒトにおける顔・表情をめぐる進化史的基盤」というタイトルを付けましたが、場合によっては、顔の問題というのは人類はおるか、



ヒト以外の動物とも共通する部分があります。顔というのはヒトだけではなく、ヒト以外の多くの動物に存在します。その中で、特に集団で暮らす社会的な動物の間では、顔や身体的な特徴を通じて個体識別をして、それに基づいて相互作用するということは、生きていくうちでも非常に重要なことであろうと容易に想像されます。

有名な進化論のチャールズ・ダーウィンは非常に有名な『人及び動物の表情について』という本を出しています。その中で、ヒトとそれ以外の他の動物との間で、例えば怒りの表情や、今、ダーウィンの本からイラストを少し出していますが、怒りを含めた多くの表情が、ヒトとヒト以外の動物で実は共通している場合があるという指摘をしています。他方で、面白いのは、ダーウィンは羞恥の表情、例えば恥ずかしくて顔を赤らめるといった表情は、極めて人間的な表情であるという指摘もしています。さらにダーウィンは、多くの動物は、いわゆる狭い意味での顔だけではなくて、全身を使って感情を表現するとしています。下のイラストはネコだと思えますが、体を丸めて、まさに全身で怒りや警戒感といったものを表現しています。

ダーウィンは一九世紀ですが、二〇世紀以降も、例えば動物行動学でアイブル・アイベスフェルトという有名な学者がいます。彼は、先天的に生まれつき目の見えない少年でも、他の人間と同じような喜怒哀楽の表情を示すということを指摘して、ヒトとしての表情は生得的であるということを主張しました。

#4

さらに、表情研究で、これは顔に関心のある方であれば皆さん既によくご存じかと思いますが、ポール・エクマンという研究者は、いわゆる「基本六表情」を主張して、簡単に言えば、喜び（笑い）、悲しみ、怒り、嫌悪、驚き、恐れというのは人類社会に普遍的に

存在していると主張しました。

この辺も山口先生の整理にほとんど依拠しているのですが、その後、心理学の内部でも、デビッド・マツモトその他から基本六表情への疑問も提示されるようになります。つまり、表情は確かに六表情という形で仮に共通しているとしても、それがどのような場面でのように表出されるのかというのは異なるのではないかということです。

例えば、人が亡くなったときにお葬式、葬儀の場面は世界各地にあると思うのですが、同じアジア圏でも、例えばお隣の韓国では「泣き女」をわざわざ雇って、非常に激しく悲しみの表情で泣くことを公的に表現しています。あるいは、アジアの中では、後ほど吉田ゆか子さん（国立民族学博物館・日本学術振興会）から詳しいバリの仮面のご報告があると思いますが、バリでは人が亡くなったときのお葬式で、私も実際に何度か参加したことがあるのですが、もちろん悲しく泣いている人もいますが、喜ばしい晴れやかな表情をしている場合もあります。要するにバリ島のヒンドゥー教の教義で、つまり死とは再生であるというような価値観と関係していると言われることもあります。

事ほどさように、どういう文脈でどのように感情表現するかというのは、実は細かく見ると文化差があります。もっと言うと、基本六表情の共通性すら近年は疑問視されています。この辺も山口先生のご著書等で詳しく説明されています。

今度は、人類学の分野に目を転じますと、基本六表情の基になる感情、六つの悲しみや怒りなどの感情や情動自体が、実は文化依存的、文化相対的ではないのかという指摘もされるようになっていきます。有名な例を一つだけ挙げますと、アメリカの人類学者でミシェル・ロサルドという非常に有名な人がいます。彼女はフィリピンのイロンゴットと呼ばれる人々の民族誌的な調査をして、その社会におけるリゲット (*liget*) と呼ばれる感情は、英語で言う *sadness* (悲しみ) と *anger* (怒り) を区別できない、渾然一体となったような感情であ

るというようなことを指摘しています。すなわち、最も基本的な情動や感情も実は文化によって、カテゴリーライゼーション（分け方）が異なるというような指摘です。

#5

それから、少し応用問題として、いきなりリカちゃん人形とバービー人形が映っています。「『かわいい』は普遍的or特殊日本的？」というタイトルを付けました。これはどういうことかということ、しばしば顔研究の分野で、かわいい顔をめぐる指摘があります。その文脈で、時々リカちゃんとバービー人形が出てきます。リカちゃん人形の説明は皆さん必要ないと思いますが、アメリカのバービー人形と比較した場合に、大きく違います。簡単に言うと、リカちゃん人形の方がバービー人形に比べてより子どもっぽいですか、あどけないといえますか、そういう表情もしくは顔の造作、つくり自体がそうなっています。

これはどういうことかということに関して、人によつてはより生物学的な説明を持ち出して、例えばコンラート・ローレンツの「ペビー・シエマ」、子どもっぽい顔立ちというのはそれを持つている対象を守り、保護し、慈しむ行動を誘発するので好まれるというような説明があります。あるいは、アジア人というのは顔の特徴がそもそも欧米に比べて幼形化、幼い特徴をとどめているので好まれるというような説明がされる場合もあります。

しかしながら、これもまた山口先生のご指摘の引用で申し訳ないのですが、同じアジア系でも「かわいい」という表現、文化的なアイデアを大人も女性も含めて非常に肯定的に使うというのは、実は日本ぐらいではないかというご指摘をしておられます。

そういうことから、アジア各地における「かわいい」というような価値観の普及・浸透と国別・文化別の差というような問題も考えてみるができるのではないか。

#6

今日は時間がないので、本当に雑駁な一例だけです。私は、実は人類学で東南アジアの研究をしています。実は近年、東南アジアで「かわいい」カルチャーといいますが、日本発のポップカルチャーにおける「かわいい」という言い方というのが、価値観も含めてある程度、浸透しはじめています。

今、二枚のスライドを出したのですが、これは両方とも東南アジアにおける日本のかわいい文化の模倣というかモデルとするようなグループです。左側はインドネシアのJKT48といって、これは名前を聞いて皆さんお気づきになられたと思いますが、AKB48のプロデューサーの秋元康さんが、ジャカルタで立ち上げたご当地ユニットなのです。それで、かなり人気があり、インドネシアのテレビ、CMなどにしょっちゅう出ています。右側はフィリピンの、その名もずばり「Kawaii5」という五人組のユニットなのです。

面白いのは、インドネシアもフィリピンもいわゆるマレー系のオーストロネシアンの人々ということ、形質人類学的には、割と顔立ち、系統、傾向としては似ているわけです。しかしながら、このかわいいカルチャーの浸透の具合で比較すると、インドネシアの方が非常に浸透していると言っているかと思えます。人気の度合い、あるいはその他の指標でもそうです。フィリピンは浸透していないことはないのだけれども、インドネシアほどではないということなのです。

この辺はまだ非常に雑駁な、私が仮説的に考えていることで、本当にそうなのかというのは今後の調査次第なのですが、私が考えているのは、フィリピンというのは、ポップカルチャーも含めて、基本的には非常にアメリカ文化の影響が強いです。ご存じのように、フィリピンは五〇年近くアメリカの植民地統治がありました。現在、ハリウッド映画などが普通に字幕なしにそのまま入ってくるという中で、フィリピンでどちらかというと非常に一番人

気がある女性のグループの顔立ちというのは、もう少し大人びた、成熟した大人の女性の美しさのようなものを体現している人々、歌手もしくは芸能人の方が人気があるということです。

つまり何が言いたいかという点、やはりかわいいカルチャーの普及に関しても、文化・社会的、場合によっては歴史的な文脈も考慮する必要があるのではないかということです。

#7

次に、文化と顔や身体ということに関係するテーマとしては、顔・身体の加工・変形・装飾・化粧というような項目も当然関係してくると思います。

顔や身体の皮膚表面の加工・操作・装飾としての化粧・刺青・衣装・仮面・装身具といったようなものです。これは抽象化して言うと、これらは自然や自然の身体、もしくは生身の身体への加工・変形・装飾・装飾ということで、研究者の中には「広義のサイボーグ化」という言葉を使う人もいます。

こうした顔や身体への加工や装飾というのは、有名な人類学者のクロード・レヴィ・ストロースに言わせれば、自然と対立する文化の象徴であるということで、レヴィ・ストロースが調査した南米アマゾンのインディオと呼ばれる先住民社会の中には、顔に非常に見事な刺青を施す習慣を二〇世紀初めぐらいまで持っていた人々もかなり残っていたようです。

それからもう一つ、道具の使用や火の使用でホモ・サピエンスが以前に比べて軟らかい食べ物を摂取することで、徐々に顔が華奢になっていくプロセスが、先史人類学・形質人類学の間で指摘されています。こういうプロセスも、文化を通じた間接的な顔の変形と考えることができるかもしれません。

#8

そういうプロセスに関しては、一例だけ挙げます。これは「徳川家の顔の変遷」ということで、左側は初代の将軍徳川家康の肖像画です。右側は徳川家慶です。家康から二〇〇年ぐらいたった後の将軍の顔ですが、ここからの指摘は、先史人類学の馬場悠男先生のご著書に基づくのですが、明らかにやはり顔のつくりが華奢になっているということを指摘されています。特に顎です。これを馬場先生は、将軍家の食生活の変化などと関連付けて論じていらつしゃいます（馬場悠男『顔って何だろっ』NHK出版、二〇〇九年）。

#9

もう一つ、身体装飾の話と関連するものとして「顔・身体の隠蔽と『顔隠しの文化』」というタイトルを付けました。世界の各地で顔や身体を隠す、隠蔽する、もしくは代替する、顔に代わるような、例えば仮面を着けるなどという文化的な慣行が存在しているということによく知られています。非常に有名なのは、イスラームの文化圏におけるヴェールです。今日も最後の報告者の西井さんは、東南アジアにおけるイスラーム教徒の女性のヴェールの問題をとり上げられます。あるいは仮面。後半の吉田さんは、バリの仮面です。写真の上で写っているのがそうですが、そのお話をされると思います。

しかしながら、こういう顔や身体を隠しているような文化は、何も括弧付きの「エキゾチック」な異文化の話だけでは必ずしもないということを、顔に関する研究者の間からは指摘されているということは、ご存じの方も多いのではないのでしょうか。例えば村澤博人さんという方は『顔の文化誌』という非常に興味深いご本を書かれています（村澤博人『顔の文化誌』講談社学術文庫、二〇〇七年）。その中で、日本の文化も実は伝統的には顔隠しの文化であるというようにご指摘をされています。すなわち、顔や体の存在感をあまり明確にさ

せないような美意識という方が、例外はあるにしても、むしろ主流、一般的だったのではないかという指摘です。

具体的に言いますと、例えば日本の伝統的な着物は、身体の凹凸といいますが、存在感をむしろ目立たなくするようなベクトルで考えられたものであり、化粧に関しても、顔を目立たせるというより、むしろ少なくとも江戸期までは素顔を人前で見せないための礼儀作法としての意味合いがあったというようなご指摘をされています。

さらに、指輪やイヤリング、ネックレスというような装身具の歴史が非常に面白いのです。実は、私は真珠をはじめとする各地の装身具の研究も少しやっています。これは有名な話なのですが、装身具の文化も本当にヒューマン・ユニバーサルといえますが、もちろん日本も含めて、基本的には世界のありとあらゆるところにあります。しかしながら、実は律令時代、奈良時代から明治維新までの約一〇〇〇年前後は、こういう装身具を着用する習慣が、髪のかしなどを除けば、非常に少ない時代が一〇〇〇年近く続いたということが、装身具研究者、宝飾史研究者から指摘されていて、日本における宝飾史の空白ということがよく指摘されています。

これに関しても、ここからは村澤先生のご指摘ですが、要するに装身具、イヤリングやネックレスを着けるとするのは、基本的には身体的な部分を強調するためにされていることが多い。だから、日本の場合はそれをしないというのは、村澤先生が言うところの顔隠し、もしくは身体感を消去する方法の価値観と関係しているというようなご指摘をされていて、大変興味深いご指摘ではないかと思えます。

それから、狭い意味での狭義の顔に戻りますと、日本でも中世では貴族の女性は自分の夫以外には顔を見せなかったというところで、あたかも今、イスラーム圏での女性に関して言われているようなことが、実は一時期日本でもあったのではないかというところで、顔の隠蔽と

その顯示 (display) をめぐる比較研究という意味でも、アジア圏に絞っただけでも非常にいろいろな可能性があるのではないかとも思います。

#10

以上を挙げたのは単なる一例で、顔を通じてはこれ以外にもさまざまなトピックがあり得ると思います。そのうち、今回は、最初にも申しましたように、前半は心理学・認知科学の研究者の先生方から、後半は文化人類学ということで、まず山口先生、心理学の立場から「文化への熟達過程を知る」ということでご報告いただきます。続きまして、二番目にロベルト・カルダラ先生、それから渡邊克巳先生が認知科学の立場から「顔認識の多様性―東アジアと欧米を比較して」というタイトルでご報告いただきます。そして休憩を挟み、後半の二人は人類学の側からということで、吉田ゆか子さんがバリの仮面の話、「仮面から考える顔の文化論に向けて―バリ島仮面劇トペンの事例から」というご報告、そして最後にA A 研の西井さんから「顔の不在がもたらすこと―ムスリム女性のヴェール着用をめぐる」ということで、東南アジア・タイのムスリム女性のヴェール着用に関するご報告があります。そして最後に、その報告を受けて、心理学から金沢創先生、社会デザイン学から北山晴一先生、コミュニケーション工学から日本顔学会の代表的な方でもいらっしゃいます原島博先生から、それぞれのお立場からコメントいただきます。そして、最後に全体的なディスカッションを行うというプログラムを考えています。

ということ、七時までの長丁場にどうしてもなってしまうのですが、どうぞ最後までお付き合いいただければと思います。ご清聴ありがとうございます(拍手)。

それでは、早速で恐縮ですが、山口先生、前の方に来て、ご準備をよろしく願います。

Ⅲ 報告

1 「文化への熟達過程を知る」

山口 真美（中央大学）

一、はじめに

中央大学の山口と申します。私は「文化への適応過程を知る」ということでお話しさせていただきます。先ほど床呂先生にご紹介いただきましたように、実は私どもは、夫の金沢を含めて、大学院生のころからの知り合いで、ふとしたことでまたこんな機会を持てるのが、研究者人生としてとても幸せだなと思い、登壇させていただいています。私は大学院時代からずっと顔について研究しています、今回、文化人類学の方々と一緒に何かさせていたただくことができればというお話をさせていただき、このような講演会を開かせて頂くことになりました。

今日は、私どものやってきた研究を紹介して、心理学の業界での顔についての研究の紹介をさせていただきます。実は、フロアを拝見しますと、今回紹介する研究をされている方や、先ほどご紹介がありました今後の研究に関わっている心理の先生もいらっしやいますので、後ほど交えて討論できましたら、活気づいていいかと思しますので、よろしくお願います。私の話はいろいろな話題を散らばせしますので、情報収集として考えていただければと



思います。

先に説明させていただきませんが、新学術領域の複合領域という少し理系寄りの領域において、二〇一三年前までの五年間、「学際的研究による顔認知メカニズムの解明」で顔認知研究を推進してきた研究です。この新学術によって脳科学や神経科学、医療という分野において顔についての研究がある程度成熟してきました。特に心理学の領域からしますと、古典的な顔に関する問題を、脳科学を含めた新たな視点から研究するきっかけができて、新たな展開で研究をさらに深めることができるのではないかと思っるところです。それらについてお話しさせていただきます。

二、先天性の相貌失認

#2

文化人類学の領域の方々からすると畑の違うお話かと思うのですが、顔を見ること、その普遍性と特殊性について検討してきたことからお話しましょう。

極端な例に、高次脳機能障害があります。レビー小体型認知症という認知症の一種です。レビー小体型認知症の問題は、これまで幻覚が見えるということでした。いろいろなところに小人が見えたり、何もないはずのところに犬が見えたり、不思議なことを口走るので、一体どうしたものかと、幻覚として処理されてきたのです。

そこで顔を見るテストをしました。そもそもが一般的に私たちヒトは、いろいろなところに顔を見ることができます。それは人間としての普遍的な性質なのです。ですがレビー小体型認知症では、それがもう少し極端になってしまいます。この図の中ではここにトラがあります、それ以外にいろいろなところにマークがありまして、それらが人とみなされた

箇所で、「ここに犬がいる」、「人がいる」と、理解し難いところに人が見えてしまうというのです。言ってみれば、人が見える能力が少し極端になってしまっている人がいるということとです。

一方で、顔を見ることには、脳の特定の領域が関わっているのですが、そこに障害を受けることによって、相貌失認という状態になる場合があります。そういう特殊な状態があることと、「顔を見る能力に関する質問紙」をたくさんの方集団に配ってその結果を見ると、生まれつき顔を見る能力が弱い人がいることも分かるようになりました。生まれつきの顔を見る能力の弱い「発達性相貌失認」は人口の約二％存在します。その方々は、生まれつき顔を見る能力が人よりも少し弱いのです。

質問紙、あるいは顔を使って記憶力を調べる様々なテストをすると分かるのですが、こうした知識がある以前は、他人が自分よりも簡単に人の顔を覚えると当人は思ってもいないので、自分の問題が分からない状態です。その結果、社会的にうまくいかず、引きこもり、社会不安などに陥りがちです。そんな問題を抱えている人が、社会にはたくさんいると考えられるのです。こうした状況なども分かってきました。

二〇一四年には日本学術会議の「マスタープラン二〇一四」に選定され、この領域はさらに進展させていくことが必要だとお墨付きをもらったことになりました。

こうした状況を踏まえて、今回は文化との接点について、顔がどのように普遍的で、どこに文化による違いがあるかという点について、お話しさせていただければと思います。

三、Top-heavyの法則

#3

まず最初に、授業でも使っているお決まりのネタで始めます。手元に顔のだまし絵がありますが、どこにいくつ顔が見えますか。代表的なものだけに丸を付けてみましたが、実にいろいろなところに顔を見ることができると思います。先ほどのレビー小体型認知症の人ほど、全く関係ないところに顔を見ることができないかもしれませんが、普通の人もいろいろなところに顔を見て喜ぶことができるのです。

全部で二〇個顔が隠されていると言われています。この二〇個の顔を探して喜んだりする。私は心理学者なので、生まれつきの観点からスタートします。ヒトは顔を見ることがとても好きで、生まれつき顔を探してしまう。ヒトにとって顔がすごく大切であるがため、むしろ大切にしようとして隠してしまったり、あるいは同じ身体の中でも特殊な対象なのではないかと考えることができると思います。

#4

生まれつきの法則ですが、発達心理学という、赤ちゃんを対象に人間の本質を探る研究をしている立場からしますと、時にはあるはずのないところに顔が見える、さまざまな個所に顔が見える、そんな法則があると考えています。

共同研究しているイタリアの研究グループが、古くから知られる、新生児でも顔を注目する法則を説明しています。Top-heavyの法則です。目が上に二つで下に口が一つ、この配置をもとに、新生児でも「これが顔だ」ということで注目します。それによりたくさん顔を見ることがよって、顔について素早く学習していく。学習が早いということは、必然的に生ま

れ育った文化による洗礼を、早い段階で受けるようになると思います。

例えば先のレビー小体型認知症になると病的に過敏になってしまうのですが、過敏でなくても顔っぱいという感覚はあります。ヒトは通常、このTop-heavyの法則で顔っぱいものをいろいろなものに見つけて喜ぶというところがあると思います。

#5

こうした図は「パレイドリア」「シミュラクラ」と検索すると大量に出てきまして、顔らしい図は人気があり、本にして出版されることもあります。

#6

私たちは、さまざまな画像を出して、そこに顔を見る法則はTop-heavyなのか、顔を見るときにはどのような基準で判断しているのかといった研究をしてきました。

#7

顔が見えるときには、表情も含めて見ることが発見されました。

実験で使われた写真を見ますと、すべてがTop-heavy、目が上に二つあって、下に口が一つというものです。こういうものを私たちは顔として見ているのです。

四、新生児の顔認識の発達過程

#8

赤ちゃんの視覚を考えると、生まれたとき、視力はとても弱い状態です。生まれてから六

カ月まで、一番視力が発達するピークがありますが、それでも赤ちゃんの見る世界はおぼろげで、視力で言えば〇・二程度しかありません。新生児の視力は〇・〇三程度しかありません。しかもこの視力というのは、遠くに離れても近くに離れても同じ解像度でしか見えていないのです。にもかかわらず、赤ちゃんは顔を見る、それがまた不思議なことなのです。先ほど言った特定の法則をもつてして顔と見ることであり、それは、顔というものが人とのつながりの基になるものということを示すようです。

#9

では、顔を見るとき、特に顔を認識するときに、脳のどの領域を使っているかということ、後側頭領域と紡錘状回の主に二つを使っています。私たちの研究で、赤ちゃんの顔を見る能力の発達を見るにあたって、この大人が使っている顔を見る脳領域がいつから活動し、いつから成熟していくのかという研究を続けてきました。

#10

赤ちゃん研究では、近赤外分光法という脳を計測する特別な機械を使い、脳の計測をしています。多少の身体の動きにも耐えて、安全に脳を計測できる装置です。

#11

一つの研究を紹介しましょう。文化適応を測った研究になります。こちらは、イタリアのミラノ・ピッコカ大学のビオラ・マキカシア (Viola Macchi Cassia) 教授と共同で行っている研究で、*perceptual narrowing* と呼ばれる研究になります。*Perceptual narrowing* は、日本語では知覚的矮小化と訳されます。

これは、母国語の聞き取りの発達とほぼ同じように生じます。聞き取り能力の発達の方が分かりやすいと思いますので、言語から解説しましょう。日本語に特化した日本人は、英語のRとLの発音が聞き取りにくくなるのは実感されているかと思います。大人になると聞き取りにくくなりますが、この傾向は九カ月ごろに成立します。生後九〜一〇カ月、初語を話す前に、使われない言語を聞く能力は落ちていきます。それと比べますと、それ以前の六カ月まで、人はあらゆる言語の子音や母音を聞き取る能力を持っています。こうした知覚能力が文化によって矮小化すること、それが知覚的矮小化です。

#12

この知覚的矮小化が言語の聞き取りだけではなく、顔を見ることにも生じることを示したのが、パスカリス (Olivier Pascalis) 教授です。二〇〇二年の研究では、言語の知覚的矮小化、つまり日本人でいえばRとLの聞き取りが六カ月はできるけれど、一〇カ月になるとできなくなる、それとほぼ同じ時期に、ヒトの顔とサル顔の顔で弁別能力を測っています。六カ月の時点では、ヒトの顔もサルの顔も同じように区別できるのですが、九カ月になるとヒトの顔しか区別できなくなります。

最初の方に生まれつきTop-heavyの法則で顔を見ると言いましたが、実はいろいろな動物でもTop-heavyで顔を見ますし、小さいときはどの種の顔も分け隔てなく見ることがわかっています。こうして、身の回りにある顔で学習していきます。やがて学習を積み重ねることによって、自分がよく見た顔に知覚は矮小化されるのです。こうしたことから、顔の文化的な学習は非常に速く、生後九カ月の段階から成立していることが分かっています。これは他種の顔の場合ですが、異なる人種の顔にも同じ様に学習されます。それについての脳科学的な研究について、次にお話をさせていただきます。

13

まずは前提として、赤ちゃんがどれぐらい、どんな顔を実際に見ているのか、頑張つて調べた研究があります。赤ちゃんのおでこにカメラを付けて、カメラを撮影し続けます。生後一カ月と三カ月の時点で、カメラに撮られた全ての顔を分析して、どの顔をたくさん見たかということ进行调查しています。まず最初が自人種の顔 (own-race face) をどれくらい見ているかです。他の人種の顔と比べると、両親と同じ人種の顔を見る比率は、ほぼ一〇〇%に近いです。三カ月になるとちよつと減りますが、一カ月ではほぼ一〇〇%、赤ちゃんは自人種の顔ばかり見ていることがわかります。

次に女性の顔を見ている比率です。つまり赤ちゃんにとってお母さんは女性ですし、周りも女の人も多いだろうから、女の人の顔をたくさん見ると予測されたのですが、これはそれほどでもなかったのです。半々ぐらいの確率で女性と、残り半分は男性の顔も見ていたということとなります。

14

さらに、赤ちゃんはどんな顔をよく見ているのかを年齢別に調べてみましたところ、見ているほとんどの顔が大人でした。当たり前のことですが、上にきょうだいがいたとしても、世話をしているのは大人なので、大人の顔をよく見ているのです。

15

そこで知覚的な矮小化を、この年齢効果 (age effect) として測る実験を行いました。大人の顔と赤ちゃんの顔を赤ちゃんに見せて、大人の顔に特化し矮小化するのはいつごろか、それを脳活動をもとに調べる研究を、私どもは行いました。

16

少々煩雑な心理学の実験手続きですので、学習させた実験と見ていただければと思います。大人の顔に学習した成績と、赤ちゃんの顔に学習した成績を比べています。実験に参加したのは、生後三カ月と九カ月の赤ちゃんです。

17

結果のグラフは、上になれば学習した成績がいいと思っただけだと思います。三カ月の結果では、大人と子どもの顔、どちらもよい学習成績でした。それが九カ月になると、大人の顔しか学習できなくなります。つまり、自人種の顔に知覚的矮小化が生じると同じように、よく見た大人の顔に特化することを示しています。

18

では、それを保証する脳の活動があるのだろうか。顔を見るときによく活動するのは、右側頭になります。これまでの成果をまとめてみますと、人見知りが始まる生後六〜八カ月ごろ、赤ちゃんは人の顔を区別するようになり、大人と同じように、顔を見るときに活動する右側頭の脳の部位が顔に活動しはじめます。赤ちゃんがどんな顔を区別してどんな顔の区別ができないか、それらも脳活動からチェックできるようになります。

19
| 20

脳活動の結果は、先ほどの学習実験で大人と赤ちゃんの成績に差が出た、生後九カ月の赤ちゃんだけを対象にしています。赤ちゃんの顔、あるいは大人の女性の顔を五秒間提示して、そのときの左右両側の脳の血流の変化を出しています。血流が上がれば上がるほど、顔に関

する活動が上昇したということになるのですが、実験の結果、大人の顔にだけ活動して、赤ちゃんの顔には活動しませんでした。つまり、生後九カ月の赤ちゃんは、大人の顔に知覚的矮小化が起き、大人の顔に反応して、それは顔を見るときに反応する脳の領域である右側頭がかかわっているということがわかったのです。

#21
↓
23

この月齢には一体どんなことが起こるかについて、次の研究を紹介しましょう。顔を見ることの文化差を調べる手法として、アイトラッカーを使った視線移動計測の研究は、とても強力です。これはカルダラ先生の成果ですので、後に詳しい紹介があると思います。私どもはカルダラ先生と共同で、赤ちゃんを対象とした視線移動の研究を行いました。

大人では、東アジアと西洋で顔を見るときに違いがあるのですが、それはいつから生じるのか、それが七カ月からだということがわかっています。先ほど知覚的矮小化は九カ月とお話しましたが、視線の移動、顔のどこを見てその表情を判断するかは西洋と日本との違いは、生後七カ月ぐらいから生じる可能性があることを示すことができました。これもまた後でディスカッションできたらと思います。

#24

ついでお話ししておきますと、近赤外分光法を使って赤ちゃんに顔の何が見えるかについて、軽くご紹介しておきます。

#25
↓
26

一六世紀のイタリアの画家アルチンボルトによって描かれた顔のだまし絵を、生後七〜八

カ月の赤ちゃんでも見ることができました。

#27
#28

赤ちゃんは顔に注目するので、だまし絵の顔を正立と倒立で好みを比べます。これは野菜で作られた顔なので、逆さにしても野菜は見えるわけで、一方で顔だけは正立にしないと見えません。実験の結果は、七ヶ月ぐらいで、だまし絵の顔がわかる正立の方をよく見るということでした。だまし絵でも顔というものはちゃんと分かって、それに対する脳活動も観察できたということです。

五、発達障害と脳機能

#31

ここではADHD（注意欠陥・多動性障害）と呼ばれる一つの発達障害を対象とした研究の紹介をします。小学校などで授業が始まってもおとなしく座っていないで、歩き回ってしまふような子どもたちがありますが、顔を見るとききの脳活動の計測によって診断できないかを検討しています。表情を見ることに、こうした発達障害のお子さまに違いがありました。一〇歳ぐらいの学童のお子さんを対象にしたものですが、健常のお子さんはハッピーな顔も怒った顔も同じように区別し顔に関する脳活動もみられるけれど、発達障害のADHDのお子さまには、怒った顔への脳活動が見られませんでした。

六、神経性やせ症と自己顔課題

#33
34

文化ということと比べると、こちらも精神疾患の話なので、少し遠い話かと思われるかもしれないのですが、「自己顔」のお話をさせていただきます。

こちらは、発達障害の研究をずっと一緒にさせていただいています獨協医科大学越谷病院の小児科医の先生が主にやられた研究です。摂食障害を対象にしております、これも文化とは遠いかなと思われるかもしれませんが、実は私にとっては文化を考えるきっかけの一つになった研究になります。

摂食障害というのは思春期の病気です。女性で一四歳ごろに発症することが多くて、どちらかというところポディイイメージの障害があります。問題のきっかけは、食べないことにはありますが、それがエスカレートしていくうちに、自分の体重をコントロールすることに専念し過ぎてしまいます。摂食障害は遠いことのように思うかもしれませんが、これも人口の二〜三%いまして、非常に真面目な生徒の方々に多いです。

獨協医科大学越谷病院は埼玉県の拠点でもあり、重症な患者さんが救急車で運び込まれてきて、こうした場合は食べ物を身体が受け付けないほど悪化しています。それでも、患者の方たちは、ついこの間までギリギリの体力で学校の運動会やマラソン大会に平気で参加していたり、クラス委員長を務めるような成績優秀な女子生徒が多いです。

#35

一四歳ぐらいの思春期の抱える問題で、摂食障害というのは、さまざまな精神疾患の中で一番治りにくい問題であると言われていています。こうした問題を踏まえて、摂食障害と顔を見

ることについて考えてみます。実験では、自分の顔と他人の顔を見ているときの脳活動を、摂食障害の方と、そうではない方とで比較しました。こうした問題には、社会性というか、自分や他人の顔を見ることに、質的な違いがあるのではと、思うのです。思春期の抱える問題と、女性特有の問題として考えてみたのです。

#36
|37

思春期やせ症、摂食障害は、思春期になることが多いのですが、実は日本の場合、低年齢化しています。最近では、学童でなることも多いです。それには、日本では小学生向けのファッション誌があり、雑誌を見て「自分もやせたい」というやせ願望がより早くから生じることが多いのかもしれませんが。先ほども言いましたように、この病は治りにくいことと、さまざまな精神疾患の中でも亡くなってしまう確率も高いものになります。しかもご本人はなかなか認めないので、病院を抜け出す確率も高い状況です。

発達障害も含めて、こうした精神的な問題には疫学的な検査はありません。そんなに大変な病気だったら、生化学的な検査があるだろうと思うのが普通かもしれませんが、発達障害も、担任の先生が問題を指摘して知能検査をして、心理士が対面して話を聞き出すような検査が主流です。

思春期やせ症の場合も、救急車に乗ってくるような状況であればもちろん瞭然ですが、それ以前であれば、複数の体型の図を見せて「あなたにとっての理想的な体型はどれですか」と聞いて調べるだけ、非常に古典的な状況です。しかも、やせようと思っている人に体型をずけずけ聞きだすというのも、あまりよろしくないのではないか。それで、もう少し、気持ち体が向かないような検査はないのかと思いついたわけです。この人たちはきっと社会にどう見られるのかということに、非常に過敏なのではないかと、そんな発想を起点に、検査

を考察しました。

38
| 39

自分の顔と他人の顔を一五秒間見てもらい、その際の脳活動を先ほどの近赤外分光法で計測する。それだけです。

40

受診されている患者さんは、入院していて人工チューブで栄養補給を受けている、非常に重い患者さんが比較的状态がよくなったときと、健常で中学に通っている一四歳の方々が比較対象となりました。それぞれに、自分の顔と他人の顔を見てもらいます。

41
| 42

それほど強い差はないのですが、見ていただくと分かるかと思えます。一五秒間顔を見たときの右側頭、つまり顔を見るときに活動する領域の活動が図に示されています。いわゆる普通の方と比べると、思春期やせ症の方ではこの脳活動が活発です。普通よりもよく活動しています。通常他人の顔を一五秒も見ていると、活動は減ります。神経順応と呼ばれる状態になり、活動はそれほど強くはならないのです。これが思春期やせ症の場合、過敏にずっと反応し続けているのです。

これは、思春期特有の心の変化と、それにおける身体的な問題をあらわすことではないでしょうか。

#43

さらに一番活動しているデータを比べてみますと、思春期やせ症、神経性やせ症の人は、自己顔でも他人の顔でも同じように活動しました。極端な話ですが、こうした問題を出発点として、日本の文化特有の問題や、顔というものがなんであるかを知るための一つの手がかりとなるのではないか、そんなことが分かっていたらと思えます。

七、マスクをした方が魅力的か

#44
#45

最後に、おまけでの話です。こちらは今日、実際に研究にかかわっている方も出席されています。ご紹介したのは企業がコーポラルとして委託された研究の内容ですが、これとは別に基礎的な研究もあります。今回のご講演では、顔を隠すというお話がありますが、それにかかわることになるかと思えます。

日本人は最近よくマスクをしています。特に女子大などでは、「今日はお化粧をしていないから」という理由で、マスクして来ることがあるようです。昔だったら、マスクをすると、それで変に思われないかと思う風潮があったでしょう。ところが最近ではマスクをした方が美人に見えるという、それが実際に研究されているのです。

#46

研究では、本人がとても魅力的な人の場合は、マスクをしていることによる魅力の変化がないようです。ちよつと残念ですね。

それがご本人の魅力が中程度以下、普通ぐらいの人ならば、マスクをすると魅力が上がる

ということでした。さらにそれと付随したもので、最近売り出されたピンク色のマスクがあります。マスクをかけて魅力度が上がるか判断をさせると、何と白いマスクよりもピンク色のマスクをした方が、さらに魅力が上がりました。この場合は、魅力の高い顔の方がさらに魅力度がやや上がるという結果もあるそうです。

#47

デイスカッションにも使っていたいろいろなネタをということで、あちこち話が飛びましたが、今後いろいろな観点から文化人類学の方々と交流させていただければと思うということ、目いっぱい詰め込みをさせていただきました。どうぞ引き続きよろしくお願いいたします。

(床呂) 山口先生、大変興味深いお話、ありがとうございます。恐らく皆さまからご質問されたいことやコメント等あるかもしれません。私も、「マスクをした方が魅力的というのは、男性もそうなのですか」とか、いろいろ聞きたいこともあるのですが、最初に申し上げましたとおり、デイスカッションは最後にまとめてということですので、この辺にさせていただきます。

引き続きまして、ロベルト・カルダラ先生、渡邊先生のご報告に移らせていただきます。ご準備をよろしく願います。

2 「顔認識の多様性―東アジアと欧米を比較して」

ロベルト・カルダラ（フリブール大学）

渡邊 克巳（早稲田大学）

（渡邊） カルダラ先生が準備をしている間に、簡単に経緯を話そうかと思います。最初に二人で話そうかと思っていたのですが、三〇分ということもあるので、主に彼に話してもらって、私がそれに対して後から何かを付けたすという形の方がいいのではないかと思います。わざわざ昨日スイスからきてくれたので、話してもらわないわけにはいかないですよ。

彼の研究は、多分ご存じの方もいるかもしれませんが、知らない方もいる可能性もあるので、簡単に言うと、顔の認知に関する普遍性のようなものに対する認知科学的な反論が中心になっています。彼の中では差があるのは当然だというレベルになっていて、では、何が起きているのかというのが最近の興味ということで、いろいろな話をしてもらえるかと思っています。

まだプロジェクタがつかないみたいですね……。では、先ほどのマスクの話から引って張ってきて話しましょうか。マスクをすると魅力的だという話は私も前から少し興味があつて、それにちよつと関連する我々の研究の一つに、後姿が魅力的だという話があります。見返り美人というのは実はあまりいなくて、大抵振り返ると「ああ、残念」という。それは何なのか。まず一つは、頭の中での顔のテンプレートが平均顔になっているために、個別の顔が出てくると「ああ、残念」となってしまうという可能性。もう一つは、われわれがメディアの中で顔に多くさらされているためという可能性があります。メディアに出てくる顔というのは大抵美人顔だったり、平均より上だったりする。そういう環境のもとで、普通の人の顔はどう見えるかというのは重要な話だと思っております。



ここでポイントになるのは、顔の認知や認識の多様性です。カルダラ先生の場合は文化による多様性という話になると思いますが、私の研究の中では、例えば聴覚障害者はどのように顔を見ているかというのがあります。この話もしたかったのですが、どうもプロジェクトもつなげたようで、彼はどうしても三〇分しゃべりたいということなので（笑）、最後のディスカッションで時間があれば少し話させてもらえればと思います。

Diversity in Face Perception: Comparisons between Eastern and Western Observers

Roberto Caldara (University of Fribourg)

First of all, thank you very much for this invitation. My talk today is about diversity in face perception, but as one diversity which is most important for me is diversity in you and me, so basically, in the last few years we have tried to understand actually how human diversity explains face processing.

[#: indicates slide number]

#2

So imagine now that you are Martian landing now on the planet and you start travelling the world, the very first thing that you would realize is that, actually, there are human being, and these human beings are different for very salient physiognomic variations, let us say skin color, shape of the eyes, and etcetera.



The Human 'Race'

#c

This actually defines the concept of race, which is a socially constructed concept. It is universal. Everywhere we have this concept of race, and I will talk about how race actually shapes face perception at the end of my talk.

#4

However, there is something that is much more subtle, and it is actually more interesting, and it is really getting much more interest recently is the concept of culture because culture actually can define as what people are believing. For instance, being here today, even if I see how you are dressing, how we are acting, we realize that actually we are very different, so basically in Switzerland there are things that we do not do. For instance, just before I see people exchanging cards. That is something that we do not do anymore in Switzerland, for instance, or in Europe. Basically, culture can be seen as a force that actually shapes our behavior. You know, it stronger than us. You adapt to your local culture. Actually, and these are two sides of the same coin, race and culture.

#5

Very recently people are starting to think that actually we should be more careful and take advantage of these differences to really understand how we are. For instance, if you look in medicine, if you go to the pharmacy nowadays and you go ask for a drug, they will give you

the same drug regardless if you are a man or a woman. We know that, for instance, there are massive differences between men and women; body size, fat distribute on, so basically the drug is not as effective on men or women. Moreover, there is actually a bias in medicine because, actually, even all these drugs are often tested in the males. To a new drug, often it is tested in males, which really generates a problem, and people in medicine are starting to be more aware of this.

#6

This is a very recent paper that came up in *Cell* one month ago. It is basically that they very clearly show for the first time, you know, in Europe, before, actually, I saw 'body size' in the title of health presentation, so diet is a big, big business in the Western countries because of the problem of the obesity. If you go to a library, you will see 50 books of different diet programs, and then if you ask the people, "Which one works?" basically nobody knows because, obviously, there is not one diet program that works. Why does it not work? Well, actually, these papers clearly show that, actually, we are different. A diet that will work for one person does not necessarily work the other one. This is what was very clearly demonstrated in this nice paper that came out one month ago.

#7

Now, let us talk about the differences between Western and Eastern. We know that there are differences, for instance, with the Asian first. I was in Scotland for eight years. This is the kind of guy that you meet in the pub on Friday. We know that, actually, in Asia, it is very common

that people after one drink they become red. This is called the 'Asian flush'. We know thing for a long time, and this is because there is a deficiency of a particular enzyme.

#∞

Now, another difference that we know is that a different – so our societies are different, as well as the structural levels, social levels. One of the differences is that, for instance, if you go to food like you ate yesterday with Katsumi, basically the very first difference when I arrived here is the chopstick. However, there is a lot softer one, so basically we had food yesterday, and we shared food. The food is in the middle and you share food. If you go to Europe and you order chicken, then you do share food. This is, again, something that is a striking contrast between individualistic and collectivistic societies.

A Growing Interest for Controlling the Role of Culture

#∞

Now, if we move to psychology, academic, people are starting to think that we need to be more cautious. Actually, this one is a paper on culture and neuroscience, but I very much like this paper, which is called 'The weirdest people in the world?' because basically this said that, actually, most of the literature in psychology is based on well-educated, industrialized, rich, developed, etcetera, etcetera, so basically the people being tested are all Westerners (most probably) and they are coming from very good universities in America and the UK and so forth because when we do our research, you know, we ask our students to do our research. Then

we publish these findings, but when you do this you realize that actually 96% of the subjects on which the literature is based are coming from the Western countries, and 68% from the US, but this is only 12% of the human population. What we know is basically based on 12% of the human population, so basically we need to be more cautious.

#0-3

Now, if you move to psychology and visual neuroscience, until very recently, we all thought that the human vision is universal. You know, language is very easy to understand it is not universal, but vision, we all have eyes, a visual brain, so is it really true? We started to do a lot of fine human studies in the last few years; one, eye movements, and especially in face processing because eye movements attain this particularity.

#3

This is something you do every day in the morning; you prepare your breakfast, and you so that actually the eyes are anticipating what you are doing. This is a very nice tool that our brain has, and it continuously ahead of what you are doing, so I like this example very much.

#4

This is the visual cortex, so basically one that is really important, the eye movements are feeding the visual cortex with information, and they you solve a particular task, which basically means, if you have two persons using two different eye movements as a strategy to do the same thing, it means that actually the brain is working on different representations, and the

task can be solved in two different ways, which is really problematic for unique concept in, let us say, face processing.

#15

When we started to do the studies (so this is one of the first studies in eye movement), you see that, at least in Westerners, when they look at faces, they do this triangular fixation pattern. We decided to investigate whether this is very true across cultures for facial recognition and expression of emotion.

Face Recognition

#19-21

I will start with face recognition.

#28

The very first thing is that what was mentioned before, we allotted our technique to analyze their movements because, just before us, people were using this regional interest as you can see here. They could be problematic because we see they vary from one study to another, and people were counting the number of fixations landing in one region or the other. For instance, how do you segment this region like this or this like the right? It is completely arbitrary, which can be problematic.

19

Therefore, we decided to create an iMap, and iMap is a MATLAB toolbox box. It is free of use, so if you want to use it, just use it.

20-21

When we did this study, actually what you see here are fixation patterns of people trying to memorize faces. These are Western Caucasian observer and the East Asian observer, and they render these regions indicated. As you see, we have the triangular fixation pattern of Westerners. However, the Asian tended to fixate much more in the middle.

22

Okay, and you can see this much better here, so when you do the subtraction, you see that actually the Westerners here in red, they tend to fixate much more on the eyes, whereas the Asians fixate in the middle with the same performance. This is important, so they achieve the same performance in face recognition with two different strategies.

23-24

Again, we are different, so to really see whether the Asians were recognizing these faces from the nose, we used the gaze-contingent technique in which basically we restricted vision with two, five, and eight degrees. Why? Because the logic was, if people from Asian are really using the nose, then in this condition in which they can only see their nose, they will not move the eyes and will recognize faces from the nose. If they are using something else, they need to

move. This is the critical condition because, in this condition, you can stay in the middle and you see all the face features.

25

When we did this, what we discovered is this; there was no difference anymore between Westerners and Easterners with the viewing window of two degrees of visual angle. With five degrees, again, no difference. However, at eight degrees, people from the East, they go back to the original strategy of fixating in the middle.

26-27

Well, this effect has been really replicated by other groups, even by Katsumi. What does it mean?

28

It means that, actually, you can solve the face recognition problems with two different strategies.

29-30

You can be local like the Western way. You can be more global like the Eastern way, and both strategies are as effective for face recognition, so there are at least two strategies.

Facial Expression of Emotions

#1

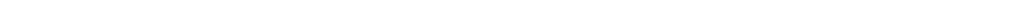
Now we will move to facial expression of emotions. An example that I use all the time is imagine that you have these apples and you ask Japanese and US farmers to categories these apples, and here you have the performance in blue for US and then red for Japan. The difference is the error between the two farmers. Here, as we can see, we have 39% differences for some of these apples. On average, here you have 21% difference between the two groups of farmers. If I will ask, do you think that apple categorization is universal (imagine if you are a business), what would you say? No, because it is such a huge difference the two that it could not be universal.

#2

However, these are the same data that have been used. They claim that facial expression of emotion is universal. It is exactly the same data, and for many, many years, people are claiming that it is universal based on the data. Do you know why? It is because just every performance here in red, it is above chance level. However, this does not mean that it is universal in our point of view because you cannot ignore differences of 39% between the two groups.

#3

Therefore, we decided to investigate again with eye movements this phenomenon to see whether facial expressions are universal.



#24

When we did this with Caucasian/Asian faces where we had two groups of observers, the very first results that we found is that East Asian observer, they were starting their fixation here.

#15

They were never going to the mouth, and this effect actually we could explain it, with the emoticons because in our country, as you can see here, we move from one expression to the other by emphasizing information from the mouth. However, your emoticons, they are much more emphasizing information from the eye region to convey one or the other expression. You see the mouth is neutral and the eyes are conveying an expression, so expressions are not universal.

#28

But, why did we find this? Ekman created a FACS coding for all of the expressions based on the activation of these muscles. However, all these faces that we used here, even they are East Asian here, the problem is that, when they created the database, they asked the people to reproduce the FACS coding of the Westerners. This is problematic that is the reason why our East Asian participants do not have an advantage in recognizing express here because these are the expressions expressed in the Western way, not the Eastern way.

#37

As you can see here, for instance, this is very popular that disgust is the activation of a particular set of muscles.

#38

To overcome this problem, what we did in another experiment, we selected the faces you just have seen and averaged them, and then on the top we added some noise. It is pure noise.

Then we ask the people, we said, “Okay, you are about to see very subtle expressions, so you have to categorize that man being happy, neutral, and so forth.”

#39-40

We had, again, Western and Eastern participants doing this task. For instance, you are seeing like this, a trial like this, and you say, “Okay, which one is happy?” Then you put the noise mask in the happy box. Let us say this one is anger, and so forth, and you did this many, many times, 12,000 trials per subject. What we see that you will see about in one second is that, actually, the noise starts to be organized, as you can see here. When you put the noise, again, on the top of the average face, you see some expression emerging.

#41

An interesting thing about this is that, when we did this across the two cultures, the Westerners were using, again, all of the features to categorize expression, whereas in East Asia they were using the top part of the face.

#2

However, perhaps the most convincing evidence comes from the experiments that we did very recently. You see these faces here in which actually the actual units are moving, and I must praise Philippe Schyns for this, very nice and elegant I think. The task of the subject is, again, to categorize these expressions.

#3

Then we can reconstruct. You know, you put all of the responses in one box, and then you will see the expression emerge. When we did this, what we found is that, again, the Western Caucasian, the fact that you see here all of these squares means that there was a lot of cohesion between the muscle that had been used and the observer, so across Western Caucasian observers, we categorized the expression by the using the same muscles, and that is what you see here. However, East Asian, there was much more confusion.

#4

The other interesting result is that, again, we Caucasians use much more the mouth to convey expression, whereas the East Asian, they use much more the eyes to convey expression. You can see here that it is very difficult to categorize these expressions on this kind of side. It is not clear. You see the difference here in the eyes, much stronger than here, so the signals are conveyed by the eyes much more from the eye region much more in the East Asian cultures than in the Western Caucasian culture, we are using much more of the mouth. Then you see it again the last time. Look at the differences for instance here in the

eyes. You see much more differences here, much more difficult to categorize this expression from the Caucasian faces.

45

When does it start? I think that Masami just said it before. We did this experiment and we just finished, so we ran babies in here, in UK, and what we found, actually, I will just emphasize these results here, so basically we found again the same results that we found in the others already at seven months.

46

You have these differences. The East Asia, so the Japanese babies, they tend to look much more in the eyes when they are decoding expression compared to the Caucasian babies that tend to look at the mouth, so at seven months it is already done.

Nature or Nurture?

47-
48

Now the question you can have is, "Is it nature or nurture? Is it genetic or is it cultural?"

49

We tested Swiss-Korean adoptees, so these adoptees arrived in Switzerland at the age of two months (most of them), between two and six months, so they are culturally Swiss. They are

genetically Koreans. We recorded their eye movements, and we projected their movements a Bayesian model, and actually the results are very clear. The Koreans were kind of super Caucasian.

#08

Then we did another very simple experiment. It is a visual saccade test. In this experiment, people are required fixate here. When the dot appears, you just have to saccade to this dot.

#15

Actually, people have found differences between Chinese and Westerners. Chinese are faster to this task and they much more express saccade. We do not know why, but it is an effect that has been revolved already in two studies. I just put the two studies here.

#28

Actually, when we did this, what we found is that the Swiss-Koreans were behaving again like the Westerners. The East Asians had much more express saccade, and the South Korean adoptees are really similar?

#28

What does it mean? That even for this very simple eye movement, the adoptees are like Westerners, indicating that culture is responsible to their patterns and not nature. It is not race. It is not genetic. It is something that you learn. We do not know why, but it is really culture.

Basically, I hope that I have convinced you that actually there are differences in processing the faces. It is not universal. Nurture is responsible for these differences.

The Other Race Effect

#15

Okay, just to finish, because this is about one minute, for the other side of the coin, I told you about race. We have been working on this. As you can see here, this has in fact has been reported for a long time. This is an Indian woman manifestation. As you can see, you have this impression that they all look the same. They all look alike, in fact. It is a fact, again, that is universal, so basically for you, perhaps, European people they all look alike. For us, you all look alike because of visual experience.

#16

We have been working for years on this first computational model that reproduced these effects. We always claimed that actually there was nothing social about this. It is not a social stereotype. It is something visual. It is visual experience. Actually, this model, without entering into the details, reproduced the other race effect. It is a computer that you train with one race and then you show the same race or the other race in studies, so we provide a statistical physical explanation of the other race effect.

#9

This other race effect starts quite early, so very, very early. After 100 milliseconds for your brain, actually, they all look alike. It is in the visual area, so it not something that is frontal, so it is visual.

#7

Very recently, we found that this other race effect, again, without entering into the details, even for voices. Even for voices we have the other race effect, so for us, it is much easier to categorize voices that are Westerners.

Conclusions

#8

Both things actually shape face perception, so early detection of race could really help you to say: Is it my group or not my group? Culture and race shape face processing and human social interactions.

#6-8

I would like to thank all of my collaborators. Especially Philippe Schyus and Rachael Jack for the part on the emotional work and you for your attention. Thank you very much.

(渡邊) それではどんな感じで続けましょうか？ カルダラ先生の内容に關しての質問を受け取った方がいいですか。それとも何か話題提供をしましょうか。

(床呂) ディスカッションは後でやります。

(渡邊) それでは簡単に解説と付け足しを。カルダラ先生のお話に私の言いたいことはほとんど含まれています。顔のユニバーサル性、普遍性ということになると、まずエクマンがどうしても出てきます。でも、チャンスレベル以上で六個全部当たったからといって、それはユニバーサルとは言えないのですね。それは当たり前ですが、実は今までわれわれはそのように考えていませんでした。同じ顔を見て「この人は怒っている」「笑っている」と質的に分かれるということがユニバーサルだと教科書の中で教えられてきたのだけれど、その量的な分かりやすさ、あるいは表情そのものの意味とかが全然考慮されていない分析がされてきたのです。

そのような認識の変化に加えて、例えば視線のようなものかなりの精度で取れるようになってきたときに、いわゆるプロセスに注目することができるようになってくるわけです。同じ正解には至るのだけれど、その正解に至るプロセスが違うということが分かってくる。そのプロセスが違うところを、きちんと測るといえることが必要になってくるわけです。

実際、我々が常に目を動かしているというのはすごく重要なことで、先ほども動画の中に出てきたと思うのですが、目の前に刺激があったら、それが目の中、頭の中に入ってくるわけではなくて、目を動かすことによって、全然違う系列の刺激として脳に入ってくる。だから、顔の認知のようなプロセスに關しては、行動と知覚は、どちらが先かではなくて、ダイナミックな過程として考えないといけない。ほんの数秒であっても、ものすごく複雑なプロセスをやっている、それによってわれわれの知覚がつけられていることを示すのが、わ

れわれ心理学者の仕事の一つだと思っています。

顔認知の多様性という点に関して言えば、私自身の研究の中で、聴覚障害者がどう顔を見るかというようなものがある、ものすごく簡単に言ってしまうと、東洋人はあまり眼や口を見ないで顔の中心に視線が集中するのですが、聴覚障害者の方はほとんど西洋人と同じような眼球運動をしています。ある意味、聴覚障害者の文化のようなものが、そこに表れていると見ることもできます。

顔認知に限らないのですが、文化の認知に対する影響のダイナミクスのようなものが存在して、思ったよりも複雑だよということに関するコンセンサスが、われわれ心理学者や認知科学者の中にできつつあります。それもあって、今回プロジェクトとして、こういうものを立ち上げられたら面白いと思って、やってきたわけです。ですから、これも最後のディスカッションのところである話したいと思うのですが、われわれ心理学者や認知科学者から、こんな形の話題提供をさせていただいて、後半では文化に深くふれることによって質的な理解を深めて来た先生がたの知見を聞かせて頂ければと思っています。

(床呂) 渡邊先生、ロベルト先生、大変興味深いお話をありがとうございます。

それでは、プログラムではいったんここで休憩ということになっています。

——休憩——

(床呂) それでは時間になりましたので、本日のシンポジウムの後半のパートに入らせていただきます。後半は二人とも文化人類学系の報告が続きますが、一人目は国立民族学博物館の吉田ゆか子さんからのご報告です。吉田さんはバリ島において、バリ島の仮面劇を、ご自身も踊り手になられながら、研究をずっとしてこられた方ということで、今日は仮面をわざ

わざわざ持参いただいています。本物のバリの仮面をご持参いただいていますので、そういうお話をいろいろお聞かせいただけるのではないのでしょうか。

それでは吉田さん、よろしく願います。

3 「仮面から考える顔の文化論にむけて

―バリ島仮面劇トペンの事例から―

吉田 ゆか子(国立民族学博物館・日本学術振興会)

一、はじめに

ご紹介ありがとうございます。私は日本学術振興会の所属で、今、国立民族学博物館にいます吉田ゆか子です。

#1

この写真は、バリ島のトペンという仮面劇のものです。これは私ではないのですが、共演仲間がやっているものです。この研究を二〇〇二年から本格的にやっています。

今日は話を今まで聞かせていただいて、すごく面白かったです。今日の私の発表では普遍の話と文化・文脈依存性の話も、どちらも出てくるのです。やはり仮面研究をしていると、仮面とは何か、顔とは何かというようなことも問いたくなってくるし、しかし一方で、バリ独特の仮面の扱い、あるいは顔に対する考え方も見たくなる。今回あまりうまくそれを分け



ていないので、ぐちゃぐちゃ出てきますが、そういう普遍の枠と、すごく文化に依存している部分が両方あるということを、あらためて今日の研究会で気付いた次第です。

それと、先ほどのロベルト先生のお話の中で、東アジア圏の人たちは、顔を見るときにすごく目が重要だという話をされていましたが、バリ島もそちらの文化圏でして、本当に今回の私の発表でも、目が大事だということが出てきます。私は、人間というのはそういうものだろうと思っていたのですが、そうではないんですね。西洋世界ではそうではないということとを今日私は勉強して、それも今日来てよかったなと思います。

バリのついでに、ちょっと思い出したので言うのですが、バリの人は、あいさつの代わりに、眉をぴくっと上げるのです。それが「はい」「こんにちは」などの代わりに全部使えて、このあたりですごくコミュニケーションを取っています。もしかしたら、それが仮面の中の目の重要性、踊りでも目の動きはとても重要なのですが、そういうことと関わってくるのかなと思いました。

#2

今日の発表は、仮面、仮面劇に注目していきます。仮面劇の中の演者というのは、仮面を着用することによって、顔を隠す、そして新たな顔を獲得するという二つのことをやっています。今日はこの仮面の着用という行為に注目することで、顔がまとう文化的な意味や、顔が担う文化的・社会的役割についてどのように理解を深めることができるのかということを考えて始めた、その取っ掛かりのようなところを紹介したいと思います。

実は、仮面舞踊劇といっても、いろいろなジャンルがあり、どのジャンルを分析するかによって、異なった理解、多様な理解が生まれると思うのですが、今回は先ほどお見せしたトペンというジャンルにします。まだ始めたばかりの研究ですので、一つの議論をまとめると

いうより、いろいろな視点を紹介していきたいと思っています。

前半では、トペンとは何なのか、そこでどういうことが行われているかということを紹介します。後半で、トペンについての先行研究や私の調査結果が、顔の文化的側面についてどのような理解を与えてくれるのかということを考えていきたいと思います。

二、仮面文化の分布

#3

仮面文化は、広い地域に分布してはいるのですが、普遍的ではありません。どの人たちも仮面文化を持っているというわけではありません。特に宗教的な理由によって、仮面を好んだり、好まなかったりということがあります。

例えば西洋世界の演劇の中では、イタリアにコメディの仮面劇があるのですが、それ以外はあまり伝統的に仮面の使用が見られてこなかったと報告されます。先行研究によると、それはキリスト教的世界観が、仮面の使用を嫌ったということなのだろうと分析されています。というのも、仮面が、演者がそれをかぶって何かに変身するというだけではなくて、神が与えた顔を否定すると思われた。あるいは、顔が精神を映し出すものとして考えられていたために、それを覆う行為が、偽りやまやかしと関連付いてしまうということがあります。

また、キリスト教の一神教的な世界観の中では、神の前に全ての人間は平等であって、見かけの違いは表層的なものであるとも考えられます。現在でも、西洋演劇では、一部の作家の人たちは仮面を使っているいろいろな作品を発表しており、してきた歴史もありますが、それが主流になってこなかったというのは、このキリスト教的な人間観、顔観のようなものがあると言われています。また、西洋演劇の中では、顔は表現の重要な場として捉える。その顔

を覆ってしまう仮面が、演者の表現を抑圧する何か人工的なものとして遠ざけられるという傾向に今でもあると、演劇人類学の中では言われています。

他方、アジアはたくさんさんの仮面文化が伝承されています。日本もすごく豊かな仮面文化がある地域の一つです。吉田憲司さんという仮面研究をされている人類学者がいますが、その地理的な広さにもかわらず、アジアの仮面には幾つかの共通する点が見られると言っています。そして、歴史的に恐らく地域間での文化交流があつて、その間での影響関係で似てきたりしているのだろうと分析しています。特に南アジア、東南アジアは、ヒンドゥー教由来の仮面文化が豊かに息づいているといわれます。本研究が着目しているインドネシアのバリ島も、まさにヒンドゥー教の大きな影響を受けた地域で、今もヒンドゥー教徒がほとんどを占めているのですが、そういう世界です。

そういうアジアの仮面文化では、仮面を被るということは偽りである、表現の場を奪うということではありません。むしろ仮面という形で目に見えない神々のイメージなどをこのように表して、それを人が被ることによって、その人と他の人間とのインタラククションがあつて、そこで神に働きかけたり、神からのメッセージを受け取る、そういった一つの装置として仮面があると言えます。

#4

インドネシア共和国は、この小さい島がたくさんあるところですが、世界的に見れば、非常にムスリム人口の多いところで、世界で一番ムスリムをたくさん抱えている国と言われています。

#5

これはインドネシア地図ですが、その中のバリは、この小さい島になります。ここはヒンドゥー教の島です。

#6

ここは、広さにすると愛媛県と同じくらいです。日本の一つの県ぐらいのところだに四一〇万人という、結構、人口過密に住んでいるところです。先ほど申し上げたように、ヒンドゥー教徒がマジヨリティーで、約八五%です。このバリにヒンドゥー教が入ってくる前は、祖霊崇拜、アニミズム的自然崇拜がありました。その後にはヒンドゥー教が入ってくるわけですが、そのもともとの祖霊崇拜と自然崇拜とヒンドゥー教がミックスされながら、バリ・ヒンドゥー教というものをつくっていると、宗教的には見ることができます。

このヒンドゥー教もそうですが、祖霊崇拜や自然崇拜というあたりも、実は仮面文化に深く関わってるところです。例えばバリの仮面は、これもそうで、裏を見たら分かりますが、木でできています。自然崇拜のあるバリでは、木自体にもご神木のようにエネルギーというか、神格が宿り得るものなので、それを切り出しているという時点で、既に何か命に関わるものとして仮面があるわけです。それから、祖霊崇拜というのは、後で紹介しますが、トペンも祖先の物語をやるものです。ですから、そこで現れてくる人物たちが単なる先祖ではなくて、半分神格化したというか、神様のようなご先祖様たちであるということが言えます。

#7

バリ島には実はいろいろな仮面文化がありまして、一番有名なのは多分トペンではなくて、このバロンとランダです。これがバロン、赤い顔をした獅子です。その隣にあるこれが

ランダで、これも仮面をかぶることができます。これが一番有名です。これは、今、バリ島のシンボルのようになっていますが、よくあるのは、村ごとに自分のところで神様として祀っています。これは、村人たちが今、供物をささげているところです。こういう仮面になった神様は村にいて、村を守っているという、守護神のような存在です。この仮面に関する行事がたくさんあります。

#8

それから、これはワヤン・ウォンというものです。ワヤンというのは、「マハーバーラタ」や「ラーマヤナ」など、ヒンドゥー教の神話の世界を演じるものなのですが、「ウォン」は「人」という意味です。人間が「ラーマヤナ」と「マハーバーラタ」との物語を上演するものなので、これはしつぽが付いていて、顔は牙があるのが分かります。これはサルなのです。「ラーマヤナ」にはたくさんサルが出てくるのですが、サルの神様というか、これはサルの軍団を表しているものです。

三、バリ島仮面劇トペン

#9

次に見てゆくのは、こういう仮面舞踊劇、仮面文化のなかにおけるトペンの位置付けです。トペンの特徴としては、初めの表紙のスライドにあったように、仮面が人間っぽいところとがあります。それは何かというと、そもそもそのストーリーが、バリやお隣のジャワで王国時代だったとき、すなわちオランダがやって来て植民地化する前、あるいは植民地化されても、まだインドネシア国家として独立する前の、王国時代の歴史物語です。その歴史物語

の中でも、王様やその下の有名な大臣たちの物語なので、必然的に登場人物の主要なものは人間になります。上演するということは、単に物語、歴史を語り継ぐということだけではなく、やはり祖先を称えるという意味があります。昔の王様たちの物語を上演することによって、精霊というか、祖霊たちも、それを見て喜んでくれるというように概念化されています。

それともう一つ重要なのは、ヒンドゥー教なので、カーストに似たものがあります。バリのカーストは、一番上がお坊さん、その次が王族たち、その下に貴族がいて、あとは平民です。ただ、八割か九割ぐらいが平民なので、普段あまり気にすることは無いのですが、こういう王族たちの物語をやっているときは、非常に位の高い人たちの物語をやっている。平民にとつては、自分たちよりも上のカーストの人たちの役になってやっているとポイントが一つあります。

登場人物は、そういう王と家臣たち、他に僧侶、王様に仕える者、一般の村人も出てきます。こういった登場人物を演じるために、トペンの仮面は人間の顔に似ているのです。

「トペン」という名前自体が「仮面」という意味でもあります。バリ語とインドネシア語も一緒に、両方とも「仮面」という意味です。「仮面を使ったパフォーマンス」のことも「トペン」といいます。この「トペン」という言葉の語源は「顔の前に置かれたもの」です。ですから、まさに顔の前に置かれた木切れのこと、木片のことです。今回は「トペン」というときにはパフォーマンス・ジャンルのことをいって、仮面は「仮面」と呼び分けることにします。

トペンの上演はどのようなところでされるかというと、基本的には儀礼と関わりところが多いです。寺院のお祭りが年に一回、バリの暦の一年、二一〇日に一回あるのですが、そういうお祭りのときや、あるいは先ほど床呂先生の話にあった、非常におめでたい葬式です。これは火葬ですが、そのときにもやります。それから、結婚式でもやりますし、あとは成人式

のようなものなど。このように何かと人々の生活の重要なところで仮面が出てくるというのが一つポイントです。

どういう機能があるのかというと、一つはそういう儀礼の場で、そこに集まってくれた人間や神格、あるいは悪霊というものを楽しませる、そして満足してもらおうということがあります。それから、最後に出てくるシダカルヤという仮面、今日は持つてきていないのですが、それが神様のような仮面です。超人的な力を持っていたと言われる歴史上の人物で、彼の仮面がこのように儀礼に現れることで、その儀礼が完成する、儀礼が祝福されると言われます。ですから、このシダカルヤの仮面が出てくることごとにかく儀礼の場では重要で、それなしには儀礼は行えないということがあるので、非常に頻繁に上演されている演目です。

#10-11

このトペンで面白いのは、一人や二人や三人と、すごく少ない人数の演者が、仮面と頭飾りを付け替えながら、たくさん役どころを演じ分けることです。

実際、この写真の上演のときには、一人の演者で七つの仮面を演じました。後でこのビデオを見ていただきますが、そういう演じ分けが面白いということがあります。

それから台本がない、使わないという点も興味深いです。演出家もいませんので、大体こういうストーリーをやるぞといったら、その場その場でセリフと動きをつくっていくという、非常に即興性の高い演目です。そういうときにどうやって上演ができるのかというと、一つは、仮面がもう役柄を決めてくれるというのがあります。

次に見ていくように、トペンの魅力というのは、つまり仮面が生きることなのだと言者の人も観客も言うわけです。「タクスー」は「人を魅了する力」とざっくり翻訳することができます。英語だと「カリスマ」や「オーラ」ですが、トペンの「タクスー」は何が人を引き

付けるのかというと、仮面が生きる、生き生きとしている状態。それから、仮面だけではなく全ての要素、しゃべりや踊りで観客が魅了されて、上演が非常に盛り上がる状態のことも「タクスー」といいます。

仮面が生き生きするとき感じられるタクスーにわれわれは注目するのですが、命がないはずの木切れである仮面が生き生きと演じる、というその矛盾を乗り越えられるときに、人はそこに神様の働きを見るわけです。

少しビデオを紹介します。

——ビデオ上映——

(吉田) 本当に、人が見ているところで堂々と仮面を着けて、あまり舞台と客席の境界というのはありません。

これは寺院祭のときの上演で、ビデオには映っていないのですが、生演奏の器楽隊が伴奏しています。初めにこういう踊りが幾つかあります。

二つ目、おじいさんの役になります。今までのところはストーリーがないのですが、おじいさん役の次の、プナサールのシーンからストーリーが始まります。プナサールは王様に仕える従者役で、ストーリーテラーで、彼が自分の王様がこんなことをしたがつっていると、観客にストーリーを紹介しています。

これはお坊さんの役です。しゃべる役になると割とジョークなども入れてコメディイになっていきます。キャラクターごとに、声がすごく違います。

これが最後のシダカルヤという神様で、彼が儀礼に現れているということが非常に重要です。

四、トペンに用いられる仮面

#12

仮面を見ていただいたら少しお気付きかもしれませんが、顔全体を覆うものと、顔の一部しか覆わないものがあります。私が持っている一番小さいのだと、これだけ（目の下から口の上の部分だけ）の仮面もあります。王様や先ほどの最後に出てくる白いシダカルヤという神様の仮面は、非常に形式張っていて、象徴性が強い。例えばこれは王様の仮面ですが、白く塗られています。こんな白い顔の人間はいないのです。特にバリの人たちはこんなに白くないのですが、神聖な色ということで白に塗られ、そういう象徴的な意味を付与される面です。

一方、大臣や老人や村人の仮面はすごく多様で、決まりがありません。インスピレーションをどこから得た仮面職人が、好きな形に作っていきます。特に道化の面というのは、現実の人間の顔の中から面白いと思ったものを、仮面職人が取り上げて、それを仮面にしていくという側面があります。

もう一つ、この仮面の多くが神聖化の儀礼の対象になっている点も重要です。仮面は神様が宿るかもしれない椅子や家というように概念化されているので、これに神聖化儀礼を施すことによって、より魅力的な仮面になると考えられています。この他、実は仮面だけではなくて、頭にかぶる冠と剣と指輪なども神聖化の対象になっています。特に頭に着けるものは、神聖化の対象になりやすいという傾向があります。というのも、バリでは、頭は自分の霊が宿り、すごく大事にしなければいけないところです。仮面を作るときは、仮面職人が足で仮面をつかんで、のみで彫っていくのですが、そうすると足によって汚されると考えて、それをそのまま顔に付けることは好まれません。ですから、一回、浄化儀礼が必要となります。

13

いろいろ儀礼の写真を入れたのですが、とぼします。

五、トペン研究から見る顔の文化的側面

14

トペンの研究からどのように仮面の文化的な側面が分かるのか。

15

一つは、顔の中心性ということがあります。顔が役柄の中心にあるということは、仮面さえ取り換えれば、違う役柄にどんななれるということにも現れていると思います。その仮面が決まると、そこからどんな性格の人で、どんな声でどんな動作をすればいいかが決まっていく。そこが衣装とすごく違うところです。仮面だけにそういう機能があります。しかも、演者は、仮面と同じ顔を仮面の裏でしなければいけないとされています。自分の顔をそのようにコントロールすることによって、体自体もそういう人物になれる。動きも、その仮面にふさわしい人物になれるということがあって、顔をコントロールするわけです。

実は、「人格における顔の中心性」というのは、いろいろな仮面研究の中で言われていることで、あまり繰り返さなくてもいいかもしれません。例えば和辻が、誰かを思い浮かべるときに、必ずその人の顔も思い浮かべる。顔を思い浮かべないでその他者を思い浮かべることはできない、と言っていますが、まさにこういうことがここにも出てきます（和辻哲郎「面とペルソナ」後藤淑編『仮面』岩崎美術社、一九八八年、一一一―一八頁）。

また、顔が人格の中心にあるがために、その顔を隠す、そこに新たな顔を獲得するという

ことが、装着者の意識も変化させていく要素となるといわれています。

#16

二つめに、中でも目が重要だということも、先ほどとも関連しながら面白いところだと思います。仮面を作る人は「特に黒目が一番難しい」と言います。目を入れるときに一番緊張する。王様は半分神様ですから、この王様の仮面というのは、観客を見つめ返すというよりは、どこか浮遊しているような、半分トランスしているような目になるといいわけです。ですから、これをかぶった人が着けたときに、観客を見返さないような視線、ちよつとうつろな感じにつけてあります。

逆に、この写真にある大臣の仮面は、観客から見ればちりちらみ返すような目になるようになっていきます。そうすることによって、観客と人間、踊り手の関係が、目の置き方によってかなり変わるのです。

下の方は、別の仮面研究の紹介ですが、ちよつととばします。

#17

これは仮面職人が作っているところです。

#18

第三に、しかし、いくら優れた仮面を作っても、その仮面がすぐさま顔のように生き生きするわけではないという点にも注目したいです。仮面というのは、演技によって死んだり生きたりすると考えられています。トベン演者の仕事は、死んだ木片に命を与えることだといえます。それは、この仮面をつけさえすればいいのではなくて、顔、体の動きです。それが

らセリフや登場人物の設定、あるいは伴奏音楽やそのリズム、それから頭飾りや他の小物、神様の力添えなど、そういうものが合わさって、初めて仮面が顔として、死んだ木の板ではなくて、生き生きとしたものとして立ち上がってくるようになります。

それで、仮面研究をするときに、仮面だけ取り出すというのは実は危険なところもあるという事もわかります。

19

この写真はその具体例で、同じ仮面ですが、三〇年後に孫がかぶったときは以前と全然違う顔に見える。小物などがだいぶ違うのと、動きも違い、違う舞踊を踊っていますので、かなり違って見えるということです。

20

最後のもう一つは、一番バリ文化的なところ、特殊性なのかもしれませんが。顔の傷をめぐめる感じ方についてです。バリの道化では、たくさんの欠損や過剰さなどを持っている仮面、顔があります。これはハンセン病やその他の病気の顔を模倣しているのではないかという研究もあります。恐らく実際に村にいる、こういう人たちをまねして作っているわけです。これはみんな村人役として現れます。

いろいろな人間がいるということがここで表現されるわけですが、顔の傷や醜さや突飛さが、おかしさや面白さの源泉になるところが一つバリの特徴としてあります。この顔が演者にインスピレーションを与えて、変な歩き方、ナンセンスなせりふも生まれてくるわけです。

ほとんどのバリの観客は、これを見て躊躇なく笑うわけです。しかし、私は調査に入ってから、これを笑えないと感じていたのです。そのときに、顔の欠損や特異性にどう反応するかというのは、すごく文化的・社会的、あるいは政治的に気付かない間につくり込まれているものなのだ、ということに気付きました。

こういった顔の相手を前にすると私の場合は、ただの傷だと思って、なかったことにして話を進めようとするのですが、バリの人はその傷を誇張さえしながら取り上げて、みんな楽しんでくれます。そういう文化的な違い、顔に対する感じ方の違いがすごくはっきり出たのがこの道化面だったのです。ただ、現在の代表的な演者たちは、その倫理性と意義についてすごく自問自答しているというか、新たな意味合いを付けて、何とかそれを理由付けしているように感じます。

それは、一つには、外国人観光客、外国人の芸能家たちとの交流の中で、バリ人演者の顔に対する感受性も変わってきていることがあるのだと思います。「身体的な欠陥の演技をもうやらない」と言う人もいます。「あれは倫理的ではない」「彼らをおもちゃにしているみたいだ」と言います。別の人は、その意義を自問します。例えば、自分の変な顔の仮面を見て、相手役はそれをいじってくるわけです。「おまえはなんて変な顔をしているのだ」。そのときに、「私の顔を見て笑うんじゃない。見かけはこんなに变だけれど、内面はきれいなんだぜ」と、そういうせりふを返すことが良くあります。このようにして変な顔で演じながら、観客を啓蒙してゆくことがあります。

また、道化は社会批判のようなこともするのですが、ある人は、そういう何かすごく劣った見かけの存在がきれいな顔をしている相手に対して批判して言い負かすというのは、よりそこに批判力が表れてパワフルなのだと行って、傷のある仮面で演じることの新たな意義を

認めようとしています。このように、顔に対する感じ方は文化的なものでもあるのだけれども、それは固定的なものではなくて、また、どんな時代によって変わっていくのかなというとも思いました。

今日の発表は以上です。すみません、ちょっと長くなりました。

(床呂) ありがとうございます。何だか西東京にしながら、ちょっと海外旅行したような気分にもなりました。

質問等は、先ほど申しましたように、後でまとめてさせていただければと思いますので、引き続き最後の報告者、A A研の西井さんのご報告に移らせていただきます。用意の方をよろしく願います。

タイという皆さまは仏教徒の国というイメージが強いのではないかと思いますが、実は南部を中心にイスラーム教徒、ムスリムがかなり生活しています。西井涼子さんは、そのタイ南部のムスリムコミュニティの研究をずっとされているということで、用意はよろしいでしょうか。

それでは西井さん、よろしく願います。

4 「顔の不在がもたらすこと

—ムスリム女性のヴェール着用をめぐる—

西井 涼子（東京外国語大学 A A 研）

一、はじめに

一―、目的

それでは、私の報告は「顔の不在がもたらすこと」ということでさせていただきます。
すみません、手元がよく見えないので、ちょっとだけ明るくしてもらいます。

#2

今日は、「顔」をめぐるシンポジウムということで、タイにおけるイスラーム復興運動の一つであるダツワという運動に参加する女性たちの顔を覆うヴェール着用をめぐる、顔を覆うということから考えてみたいと思います。

先ほど、渡邊先生が、普遍に至るプロセスについて認知心理学でも考えるということをおっしゃっていました。実はそのお話を聞いて思ったのですが、私たち文化人類学、人類学でもやはり同じようなことがあって、私たちの場合には「人間とは何か」ということを考えていくことがあります。

ですから、最終的には「人間とは何か」ということを考えるのですが、私たちの方法論の特徴が、フィールドワークということで、結局自分がそこに行ってそこで経験したことを基



に、すごくミクロなデータで何が言えるかということを考えるのですが、そのときに、単にミクロにこんなことがありましたというのではなく、そこから普遍にむけて何が言えるかというのを考えてみようと思うのですが、報告自体はタイの一部地域のお話になります。

#3

先ほど床呂さんが少し紹介してくださったのですが、私の調査地は青い丸のサトゥーン県というところです。少し見えにくいですが、これはタイ全体で、カンボジアとラオスとミャンマーと、北の方は中国に接して、下がマレーシアです。私の調査地、ずっとこれまで二〇年ぐらいにわたって調査してきたところは青い丸ですが、そこはマレーシアとの国境地域になります。

タイは人口の九五%ぐらいが仏教徒で、ムスリム（イスラーム教徒）は五%ぐらいしかいません。ただ、南タイに多くのムスリムが住んでいます。実は今日のお話は、この南タイのムスリムではなく、この赤い丸のメーソットというタイとビルマの国境の地域のお話になります。

顔というテーマを床呂さんから伺ったときに、顔を覆うということをヴェールで考えられないか。さらに、ヴェールで顔を覆うことを考えたときに、何かふと「そういえば、日本だつて顔を覆うつてあるよな」と思ったのです。その顔を覆うのが何かというと、死者の顔を覆うということ。つまり、人が亡くなったときには、お亡くなりになりましたということ。顔に布をかけるというのがよくあると思うのですが、実はタイでも同じようなことがありました。

#4

今のお見せしている写真は、南タイの、今までずっと調査している村のムスリムの女性が亡くなったときのものです。ムスリムも亡くなったときには、下の布をまずかけて全身、顔も隠すのですが、でもやはり誰か来たら、この布を開けて顔を見せるといふことをやります。

#5

最終的にムスリムは、こんなふうになんて全身白い布で覆って、土葬します。

#6

私の調査村というのは、ムスリムと仏教徒が半々で住んでいるようなところでしたので、通婚もあるのですが、仏教徒の場合は火葬が多いのです。仏教徒は普通に一番いい服を着せるといふような言い方をするのですが、やはり布団に寝かせているときは薄い毛布のようなものをかけます。ただ、その毛布から棺桶に移したときにはもうはがしてしまうのですが、やはり顔も、亡くなったときには人が寝ているのではなくて死んでいると分かるような形で顔を覆うということがあります。

#7

これがムスリムの女性の写真です。今日のお話は、ムスリムの女性といつても、少し特殊なムスリムです。というのは、これはダツワというイスラーム復興運動の女性の格好です。後で写真をもう少しお見せしますが、通常のタイのムスリムの女性というのは顔を出した形でのヴェールをかぶっています。

一〇二、顔の不在

#8

「顔を覆う」がタイ語では「pit na」といいます。naが顔、pitが閉める、閉じる、ふさぐという意味です。これで、ヴェールで顔を覆うということになります。

例えば調査地のメーソットに行ったときに、やはりこういうダツワの格好をした女性たちがまちの中にたくさんいるので、例えば初めて知らない女性と会ったときも、何となくこの顔を覆った状態で会っていると、何回か会っても相手が誰だか分からない。どの人と会っているかわからないという気持ちです。それはやはり相手の表情を見ることができないということが大きいのではないかと思います。

ただ、ムスリムの女性の場合は、女性に対しては顔を覆う必要はないですから、女性だけの場では、つまり男性がいないところでは顔のヴェールを取って、顔を出したりします。ですから、そういうところで顔を合わせると、その次に例えば町で会った時に顔を覆っているも「この人はファティマさんだ」などと、そういう形で相手が分かったような気がするということがあります。

一〇三、ムスリム女性のヴェールをめぐる研究状況

#9

少し簡単に、ヴェールをめぐる状況をご説明します。ムスリムの女性のヴェールをめぐることは、一九七五年の「国連婦人の一〇年」を契機に、世界的なレベルで研究が注目されるようになりました。これは一九世紀末から近代化に伴う女性解放として、まず「脱ヴェール

化」、つまり女性がヴェールをどんどん脱いでいくというようなことがあったのですが、逆に今度は、一九七〇年代ぐらいからはイスラーム復興の潮流の中で、女性たちがヴェールを付けて社会に出ていくというような新たな動きが出てきました。その中で、女性のヴェールをめぐる研究も近年非常に盛んになってきています。

#10

この顔を隠すかどうかということですが、実はムスリムの場合、いろいろなことを判断するとき、コーランというのは翻訳してはいけないということで、全世界一つの啓典になるわけですが、そのコーランの記述に基づいて判断するということがあります。

このコーランの次の記述を最初だけ読みます。「女性の信者にも言っておやり。慎み深く目を下げて、陰部は大事に守っておき、表に出ている部分は仕方がないが、その他の美しいところは人に見せぬよう。胸には覆いをかぶせるよう。自分の夫、親、舅、自分の息子、夫の息子、自分の兄弟、兄弟の息子、姉妹の息子」等々、「女の恥部というものについてまだ訳の分からぬ幼児、以上の者以外には決して自分の身の飾りを見せたりしないよう」というふうに言います。ところが、同じ記述で全く逆の解釈ができるのです。

一つは、必ずしもこれによって顔を覆う必要はないと言うことができる。一方で、このダッワ運動の人たちは、これによって顔も覆うべきなのだという考えになります。

#11

先ほどメーソットのことを言ったのですが、なぜメーソットでこのダッワ運動が盛んかということ。実は、メーソットというのはタイとミャンマーの国境に位置しており、古くからの交易路です。この交易路を通じて、南アジアのインドやバングラデシュ、パキスタン

などと陸路で交易がありました。南アジアから発するダツワ運動も、メーソットのを通じてタイ全体に広がっていきました。

ですから、南タイで私が調査しているときに、南タイはマレーシアとも近く、ムスリムが多いので、南タイの方がそういうイスラーム復興主義的な運動が盛んかなと思っていましたが、ダツワは時期的にはメーソットからむしろ北タイのチェンマイなどに入って、南タイはむしろ遅れて後で入ってきたということが分かりました。それで、今回はメーソットの方に調査に行ってみたわけです。

二、メーソットのダツワ運動

#12

ダツワ運動は、一九三〇年代にインドのデリーの南において、西洋と対峙した中でヒンドゥー教徒の浄化運動が非常に盛んになってきた時期があり、そういうときに、ムスリムがヒンドゥー教徒に改宗してしまうという危機感に駆られて起こった運動です。

この運動自体の目標が「ムスリムのスナへの復帰」、預言者ムハンマドの生活を理想として、個人の実践を通じてイスラームをもう一度自分たちの生活の中に取り戻そうというような運動として始まりました。実は現在では世界中にこの運動が広がっています、毎年パキスタンのライウィンドという所では一〇〇万人以上が集まります。ムスリムにとっては生涯に一度はメッカに行くことが義務とされていますが、これは実はメッカ巡礼（ハッジ）に次ぐ第二のハッジだと、この運動に関わる人たちは捉えています。

#13

このダツワの方法です。なぜここまでこの運動が広がったかということですが、実は教義自体を単純化して、こういうことをすれば徳が得られますというような分かりやすい話をする以外にも一つあるのは、身体的に実際に旅行に出ることが非常に大きな要因になっているのではないか。これは月に三日、それから年に四〇日もしくは四カ月の間、シユロと呼ばれるリーダーの下でモスクを回っていきます。

このときに、出ているその三日間というものは宗教のことだけを考えます。俗世から離れて、仕事などいろいろなことがあっても、宗教のことだけを。だから、朝から晩までイスラームを勉強し、礼拝をし、ということを繰り返します。月に三日間ということでリフレッシュする、ムスリムである自分のイスラームの信仰というものを新たにすることをやっています。

#14

ダツワ運動では男女隔離というのが非常にはつきりして、基本的にはほとんど男性ばかり行くことが多いのですが、男女で行く場合には必ずペアで行かなければいけません。男女がペアで行くときというのは、女性の場合は夫、もしくは自分が結婚できない男性、つまり自分の兄弟、お父さん、そういう人と行くことです。

これで面白いのは、男女が一緒に行くこの旅行は「マストウロ」という特別な呼び方があり、男性でしたらモスクに泊まって、例えば四〇日というのも、村を替えてモスクを三日ごととずっと移動していくという形でやっていきます。この場合には、女性は家に泊まり、男性はモスクに泊まります。その女性が集まって、まとまって泊まる家では、その家の家主も、男性は家にはいけないのです。ですから、どこか別のところに家を開け放して出ていか

なければいけないということで、マストウロの女性が泊まっている家は、女性だけの空間になります。

ダツワ運動に関わる人たちの生活で、私が非常に印象的だったのは、今もタイは政治的に非常にもめています。二〇一三年一二月にタイで非常に大規模な反政府運動が起こったときに、国中挙げてみんなそれに熱狂しているような状況だったのです。それで、普通のムスリムの家に泊めてもらっていましたが、朝から晩までみんなテレビを見ているのです。しかも、例えばメーソットからバンコクまで、南タイからでもそうだったのですが、各地からバスを仕立てて、バンコクにデモに出掛ける人を募って送り出すというような、政治的に非常に大きな運動の最中だったのです。

私がダツワの人々にインタビュしたときには、皆さん「私には関係ありません」という態度なのです。これは男性に対して女性でも同じようなことです。結局、政治的に自分たちは宗教に生きている、イスラームに生きている。ですから、こうした政治運動には関わりませんというような、普通のムスリムの人と非常に明らかに異なった対応をしているというのが印象的でした。

#15

写真を何枚か見ていただきます。

これがダツワの女性で、メーナニーといいます。この方は顔は覆っていないのですが、最初にターリムという女性の勉強会をメーソットでやっていました。実は最近、ミャンマーがムスリムを弾圧しています。モスクや学校が焼かれるというようなことが続いています。非常に多くのムスリムがメーソットに流入してきています。それで、ビルマ語のターリムという勉強会と、それからタイ語のターリムという勉強会が行われていました。現在、ダツワ運

動に熱心に関わっているのはミャンマーから流入したムスリムが多かったです。

この方は元タイ仏教徒で、夫がバングラデシユの人なので結婚してムスリムになっているのですが、こうしたターリムを最初に始めた人です。メーソットは交易の町なので非常に商人が多いのです。彼女も国境の町で宝石を売る店を何軒も持っているという人です。だから、商売するのに顔を隠すと良くないからというので、彼女自身は顔を隠していません。けれども、嫁、娘は顔を覆っている人もいます。

16

これが彼女の家で彼女を手伝っている人です。周りにミャンマーから来たムスリムのダツワ運動に関わっている人たちがたくさんいるのですが、この人もその一人です。

17

これは、ターリムの女性の勉強会の場所です。これはビルマ語のターリムで、ここは女性だけの場なので、みんなこの家の中に入ってくと覆いを取って顔を出しているのです。けれども、「写真を撮っていいか」と聞いたたら、「撮ってもいいけれども、ちょっと待って」と言われて、みんな一斉にこのようにヴェールを着けて撮らせてもらいました。

18

これがターリムの先ほどの勉強会が終わって、外に出たところです。出るときにも、再びこういう形でヴェールを着けて帰っていくということで、一人、女性が着けていませんが、彼女だけは年を取っていて、もういいわということと着けていなかったのですが、これ以外の人はみんな着けていました。この人が、後でちょっと言おうと思っっているファティマさん

という人です。

#19

この人はイスラームの先生です。彼女の考え方というのは、ムスリムの女性は顔を覆う必要はないのだと。彼女はイスラームをバンコクの近くの大きな宗教学校で七年も教えていて、非常にイスラーム知識がある人なのです。要するに、中東に留学した人たちなどはダツワに批判的なことが多いのです。ダツワが言っていることは間違っているというようなことをしばしば聞きました。彼女も、そういう意味では顔を覆うことに関しては、その必要はないと言っていました。

#20

これがダツワではない普通のムスリム女性です。つまりダツワ運動に関わっていない人々は、外に出るときはヴェールをかぶりますが、顔を覆っている人はいないというのが普通の状況です。

三、ヴェール着用の事例

三一、動機

#21

私が今回ヴェールで顔を覆った女性たちに「なぜ顔を覆ったのですか」ということを聞いてみると、結局そのほとんどの人が、ダツワに出ている三日間や四〇日という間に、「他の

女性たちがみんな顔を覆っている。そうすると、自分も同じように顔を覆いたいという気持ちになった」ということを言います。

#22

その理由としては、例えば「女性はダイヤモンドのようだ」と。これはイスラームの解釈から来ているのですが、「引き出しにしまって外に出さないようにしなくてはならない」「女性はバナナのようだ。もしそのまま放っておくと新鮮だけど」。つまり、皮をむいて顔を出して外に出る。むいてしまうとすぐにしおれて駄目になってしまう。「だから、女性は外に出るときには顔を覆わなくてはならない」というようなことを言ったりします。

三一六、サイダー（三三八歳）

#23

具体的にダツワに参加した人の例を見えます。例えばサイダーさんという人はタイム・ムスリムですが、バンコクで夫婦で働いていました。彼女は大学も出ていて、夫も大学を出ています。夫は空軍の将校、彼女はIT企業で非常に高給を取っていました。そういう世俗的に成功している夫婦だったのですが、結局、夫がバンコクでダツワに行き始め、やがて妻を誘って、そして二〇〇三年には、二人でせっかく就いた仕事を投げ打ってメーソットに帰ってきてしまいました。二人とも実家はメーソットだったのです。

帰ってきたら、彼女の実家は普通のタイム・ムスリムの家なので、親族もお母さんも誰も顔を覆っていないわけです。そうすると、お母さんは「あまりに厳格過ぎる」と家上げてくれなかった。お父さんも「そんな顔を覆っていて、道で出会っても娘だと分からない」と言っ

て、道で出会ってもお父さんに無視されたということも言っていました。でも、彼女としては、とにかく説得するしかない、一年かかってとにかく毎日毎日説得したということで、親も諦めて、今は何も言わなくなったということです。

彼女が言っているのが「顔を覆うことであの世で報酬が得られる、この世では安全を得られる」。つまり、ダツワの格好をして顔を覆った女性を、男性は直視することができない、目をそらさなければいけないと感ずるのです。女性の方もすれ違ったときに男性を見たりしないように目を伏せるのですが、すれ違った人たちもそういう女性を見たら、みんなじっと見ることはしないで、目をそらして目を伏せるということで、結局安全だということを行います。

三三三、ファティマ（二八歳）

#24

ファティマさんという人はミャンマーから移住してきて、私はタイ語しかできないので、ビルマ語のターリムという勉強会に行ったときには、彼女が通訳してくれました。息子と二人暮らして、二〇歳のときに結婚したのですが、子どもがお腹の中で七カ月のときに夫が事故死してしまったということで、バンコクにいたのですがメーソットに帰ってきました。

子どもが一歳半のときに、二二歳年上の四五歳のタイ・ムスリムの男性が一生懸命「結婚してくれないか」と言って、彼自身はもう妻がいたのですが、とにかく彼女に何回も何回も求婚を繰り返して、ついに彼女は再婚することに同意したのです。ところが、その夫は結婚してみると、家庭内暴力を振るう夫だったので。彼女は首を絞められてご飯が食べられなく

なったり、電気コードで息子をしつけとして殴る、自分への暴力は耐えられるけれども、息子への暴力は耐えられないということを言っていました。

#25

四年前から、彼女はダツワに出始めました。だから、もともとは彼女も顔を覆っているわけではなかったのです。先ほどの最初の写真のメーナニーという人と一緒にいた女性です。ダツワから戻ってきたときに、顔を覆うことを決意しました。顔を覆い始めたときは、自分にできるだろうかと思っただけで、やってみるとよかったです。初め、夫はそれを嫌がってやめさせようとしたのですが、二年前にいいに彼女は離婚することになりました。

今は、彼女は元夫がメーソットに帰ってきてても、道であいさつすることなく彼を避けることができます。顔を覆っているから、彼を無視することができるというわけです。

三十四、顔を覆うことによる変化と批判

#26

この女性たちに話を聞いて共通してみんなこういうことを言います。「心がより平穏になり (cicai sagop khun)」、幸福になり (mi khwan suk)」、心地よくなる (sabai cai)」というようなことを、みんな異口同音と言っている。顔を覆ったらどういう気持ちになったかということ、このように言います。

さらには、夫との関係も良くなったと言う人もいました。「アッラーは愛情をくれた。なぜなら、私が顔を覆っているから他の女性とは異なっている。他の男性は私の顔を見ることできない。彼の視線では、私は永遠に美しく見える。彼はいつも君は美しいと言う」とい

うような、これはうまくいつている例です。このようなことがあります。

#27

一方、普通のムスリムから見たときには、例えばイスラーム学校の校長先生に話を聞いたときにも、ダツワの女性が顔を覆ってアラビア語の授業をするのに、口元が見えないのは子どもに教えるのに良くないということで、顔を覆わないでくれと彼女を説得しているということも言っていました。ダツワではない人は、イスラームの教義からいくとそんな顔を覆う必要はないのだということも言います。

四、顔を覆うヴェール着用者の対峙する他者

#28

結局、彼女たちが顔を覆うことによって、一つは神と向き合うということがあるのではないかと思えます。これはサイダーさんの言葉ですが、「顔を覆うと礼拝も急いでやる。自動的にやるようになる。顔を覆っていないと、ついつうっかり忘れることもある。五回全部そろわない」。一日五回の礼拝はムスリムの義務でやるべきことなのですが、これがそろわなかったりするけれども、顔を覆って生活をしていることによって、全て宗教的な生活ができる。そして神を畏れるということで、常に神と向き合うということがあります。これは、私もインタビューしていて感じたのですが、顔を覆った黒いヴェールの中で、彼女たちは非常に宗教的な内面というものをそこで保っているような感じがしました。

もう一つは、夫と向き合うこと、夫との関係をより考える。つまり顔を覆うことによって彼女たちが顔を見せる相手が非常に限定されてくるのです。一つには、男性は夫と、父親や

兄弟という親族だけです。もう一つには女性です。これは、彼女たちにとっては結局、顔を覆うということによって、イスラーム的な生活が可能になると考えられるわけです。

五、終わりに

#29

顔というのはイメージの原型です。これは宇野さんというドゥルーズなどを研究している学者が書いていたのですが、「顔は誰かの顔であり、そのまま人格であり、主体であり、主体化されたイメージであり、他者のイメージであり、他者は顔として現れるのだ」と（宇野邦一『ドゥルーズ 群れと結晶』河出書房新社、二〇一二年）。先ほどの仮面の話で吉田さんが和辻さんを引用していましたが、似たようなことを多くの人がいろいろな言い方で言っているということにもなるのでしょうか。

#30

では、誰に向けてその顔は隠されているのかということ。結局は不特定多数の男女を含んだ公的空間において、ヴェールによって顔は隠されるということが言えるのではないだろうかと思われます。そのときに、一つパラドックスのようなものももしかしたらここで起こっているかもしれません。というのは、ヴェールで覆ったムスリム女性の顔を見てはいけません。つまり顔の不在ということが強調されるわけです。私が前、このムスリム女性の話をしたときに、目が重要だということをコメントされたこともあるのですが、けれども、ここではむしろ私が顔が重要であると思ったのは、やはり目を見てはいけないというのが、まずこういう格好をしたときには言われるものですから、やはりこの場合には目よりも顔が重要

ではないかと思いました。

一方では、彼女たちが歩いてくる姿そのもの、つまりヴェールで覆われた全身が、ある意味、ダツワのムスリム女性であるという強烈なメッセージになっています。そのように周りの人も扱わなければいけないということがあります。そういう意味では、例えば一つのイメージを顔としますと、ダツワのムスリム女性だというものを生成するということが、顔を隠すことによって出てくるということが言えるのではないかと思いました。

実は、ダツワのリーダーの娘が、非常に美しい娘さんだったのですが、もう一二歳や一三歳から顔を覆ってしまふ。そうすると、男性と知り合うきっかけがないから、「では、結婚するのはどうするのですか」と聞いたときに、娘が結婚相手を探すときには結婚させたい男性に写真を見せればいいのだと。「写真だったら合成ができるかもしれない」と言ったら、それは母親が代わりに会う。つまり花婿候補の男性の母親が彼女と会って、「この写真どおりだった」「魅力的な女性だった」ということを母親から聞く。それによって判断するのだということを使うのです。

つまり、ムスリム女性が顔を隠すというのは、対面の状況において顔を隠すというのが重要なのだということが言えるのではないかと思いました。

#31

顔を見たことがないと、何か相手が分からないという感じがするということを言ったのですが、鷺田さんという哲学者も「顔の不在が人を不安にするのは恐らく、その顔がもはや何かとして限定できない曖昧な存在に移行したからである」と言っています。身体表面を平面へ変換する操作と、それによって変化された存在の被膜全体が顔に収斂しているというような言い方。つまり、その人の存在全体が顔に収斂しているということを、哲学者の鷺田さん

が言っています（鷺田清一『顔の現象学 みられることの権利』講談社学術文庫、一九九八年）。

相手の顔を見て相手の人格を把握した気になる。そこから今度は、自分というものが生成される。他者に対峙する、他者を把握することによって逆に自己が生成されるような過程があるのではないかということです。

32

はじめの問いにもどって、なぜ死者の顔をすぐに覆うかを考えてみたいです。亡くなったときには、自分が対面していた、自己を生成させる交感関係にあった他者が変質してしまったという危機的状况にあるのではないか。そういう他者を「この方は亡くなったのだ。死んでしまったのだ」ということを表す装置として、この布が考えられるのではないかなと思います。

顔の不在ということと言うと、ある意味、ムスリム女性のヴェールというのは女性自身、見られるものを守るものとして機能するかもしれない。死者の顔を覆う布というのは、逆に見る者を守るというようなことももしかしたら言えるかもしれない。ここから言えることは、顔というのが非常にある種の力を持って、私たちの存在や関係性というものに迫ってくるものであるということが言えるのではないかと思いました。以上で終わります。

（床呂） 西井さん、どうもありがとうございました。タイのムスリム社会という、あまり普通には知ることができない社会における顔の不在、もしくは隠蔽をめぐる話は大変興味深かったと思います。



IV コメント

(床呂) それでは、報告者の方もそろわれたようですので、いよいよ本日のシンポジウムの最後のパート、コメントとディスカッションにさせていただきますと思います。コメントーターとしては、今回、日本における顔研究の、本当に第一人者の先生方お三人にお集まりいただきました。

最初のコメントーターとして、東京大学のコミュニケーション工学ご専門の原島博先生にコメントをお願いいたします。原島先生はあらためてご紹介の必要はないかと思いますが、本当に日本における顔研究の第一人者、日本顔学会の元会長ではば創立メンバーと言っているかと思えます。

それでは、原島先生、よろしく申し上げます。

原島 博 (東京大学)

原島です。ももとのプログラムでは、金沢先生が最初、北山先生が次で、私が最後ののですが、金沢先生は最後に時間がなくなったときの方がいいとおっしゃっていて、また北山先生が隣で実に素晴らしいコメントを準備されているのを見て、これは先に話した方がいいかなということ、最初に私が話させていただきます。

私は、ももとは工学部電子情報工学科という硬いところにいたのですが、あるとき顔に関心を持って、顔の学会をつくるお手伝いをさせていただきました。ここにも顔学会の方が



おられますが、初めての方もおられると思いますので、少しだけ最初に紹介させていただきます。

日本顔学会は、一九九五年、ちょうど二〇年前にできました。今年二〇周年ということですから。いろいろな活動をしました。中で有名なのは一九九九年の「大『顔』展」です。顔学会の創立四周年記念ということで、全国で四〇万人以上の人が入るといふ展覧会を開催しました。大「顔」展という名前は、たまたまこのネーミングを考えたときに、横に「大恐竜展」のポスターが貼ってあった。大恐竜展があるならば、大「顔」展があってもいいというそれだけです。

また、今年二〇周年を迎えまして、『顔の百科事典』を刊行させていただきました（日本顔学会編『顔の百科事典』丸善出版、二〇一五年）。ここにいらつしやる方にかなり執筆者がおられます。二万五千円という非常にお手軽な価格になっていますので、ぜひ購入していただければと思います。

さて、私はそれまでは工学部の電子情報工学科という非常に狭いところにいて、その文化が当たり前だったと思っていたのですが、それが日本顔学会ができたときに、いわば異文化に接していろいろなショックを受けました。

具体的には、顔学会の発足は一九九五年ですが、その前の一九九一年八月にワークショッブ「顔」を軽井沢で開きました。これが顔学会ができるきっかけだったのですが、そのときにいろいろな分野の方に声を掛けました。人類学者の香原先生。顔学会が発足した時に初代会長になっていたいただきました。そして皆様ご存じのポラ文化研究所におられた村澤博人さん。村澤博人さんはその後顔学会の中心になっていただきましたが、残念ながら二〇〇九年六月に亡くなられてしまいました。村澤さんにもこのときに初めてお会いしました。

その頃、私自身はコンピューターを使って顔画像処理をしていました。例えばモナリザの顔に対して、今日もお話しがあった Facial Action Coding System (FACS) を使っているのと表情づけをしていました。これを動画に見せたら、ワークシヨップの後に、村澤博人さんからお手紙を頂きました。シヨックを受けたと。コンピューターで処理していますから、デジタル化しているのですが、人の顔を一〇で表現したとき、それはもはや顔でなくなっているのではないかと。顔というのはそういうものではないと、ある意味ではおしかりを受けたわけです。

そうか、では顔とは何なのか。そのときに考えさせられました。僕の立場では、顔写真を一〇で表現しても、顔に対して冒瀆しているとは思わないのだけれども、そういう見方もあるのだと。

そして、顔学会ができた頃だと思うのですが、今日も名前が出てきますが、大阪大学総長をされた鷲田清一先生。最初にお会いしたときに、私よりもずっと年上だと思ったら、逆に年下だったというのが後で分かったという方なのですが、その方がこういうことを、あるところにお書きになっています。「メディアの時代、顔が氾濫している。しかし、それは顔ではない」。例えばテレビに出ている顔。その前でこちらが裸でいても恥ずかしくない。テレビの前に、アナウンサーがこちらを向いている、こちらは裸でいても問題ない。そのような顔は、顔とは言わないのだと。見られて恥ずかしくなるのが、顔なのだ。週刊誌の中づり広告などでも顔がたっぷりあるけれども、それも顔とは言わない。いま顔ではない「顔」ばかり氾濫している。そういう内容でした。顔と、そうではない「顔」、一体何が違うのか。そのような問題提起でした。

これは私の基本的な立場なのですが、顔とは関係であると思っっています。関係を失っては、顔は顔ではなくなります。一方で、科学は、それをものとして扱わないと扱えません。そのようなジレンマがあります。

顔は、やはりもともと恥ずかしいものです。恥ずかしくないものは、顔とは言えない。顔のメイクも恥ずかしいからこそするのではないか。さらには顔は、見られると気になるものです。顔は隠したいものかもしれません。そういえば、今日は顔を隠すという面白い議論がたくさんありました。

顔は「聖なるもの」です。仮面はそのような聖なるものを表現しています。さらには顔は「性なるもの」、そして「精なるもの」です。まさにそこに人の精が表れます。日本顔学会に關係するようになって、顔とはそういうものだということ学びました。今日もその立場からの発表があつて興味深く聞かせていただきました。

関連して、今日の御発表は、前半と後半の違いが非常に面白く思いました。顔を扱うときに、ありのままを見るのと、コントロールして見るという違いです。前半は、例えば実験心理学の方は、ありのままを見ていない。ありのままを見たら、どのように研究したらいいかわからない。ありのままではなく、そこからいろいろな要素を取り除いて、非常に簡単にコントロールした顔を見ることによって、結果が出るという立場を取っておられる。これに関して、後半はできるだけありのままを見ようという立場でした。この違いは、顔を普遍的なものとして捉えるか。文化的なもの、多様なものとして捉えるかの違いなのかもしれません。

文化人類学の方は、基本的にはまず文化で、個別から入ります。そして個別なものの中から普遍が何かを一生懸命探ろうとする。一方で、心理学、特に実験心理学の方は多様なもの

は研究しにくいから、まずはなるべくそれを普遍にするための努力をする。コントロールというのはいくことなのでしょう。そして普遍なものが得られたら、その次のレベルとして多様をやりたい。そうすると文化人類学的なアプローチに近づいていきます。まだギャップがあるけれども、そのような意味で、今日非常に面白く伺わせていただきました。

さて、私の専門はコミュニケーションです。さきほどもそう紹介されました。もう少し具体的に言うとメディア技術が専門です。

メディアと顔は密接な関係があります。今日はあまりその議論は出なかったのですが、文化人類学においてもメディアは、今という時代を考えると重要な要素になっていると個人的に思います。顔の現在は、メディアを抜きにして考えられません。

その立場からかなり前になりますが、メディアは顔を隠しつつあるのではないかと指摘したことがあります。それを「匿名のコミュニケーション」と名付けました。いまメディアでは顔を見せないコミュニケーションが中心になりました。フェイス・トゥ・フェイスでないコミュニケーションをメディアは当たり前前にしてしまったのです。そして、メディアは、先ほども申し上げたように「顔」、本物ではない顔を氾濫させてしまいました。それはまた、メディアにおける顔の標準をつくってしまいました。

先ほど、バックシャンはメディアの中の顔が美人だから、みんなそれに感じるのではないかという議論がありました。確かにメディアの中には美男女の顔が標準になっていますから、逆に言うと、普通の人がテレビに出ると、そこに映っている自分の顔をテレビの中の美男女の基準と照らし合わせてがっかりします。もちろんそうではない方もここにはたくさんおられます。

また、メディアは顔を均一化します。これが一体どのような意味を持っているかは、これ

からの重要な課題だと個人的には思っています。

すみません、個人的な立場から勝手にコメントというよりも問題提起をさせていただきました。どうもありがとうございました。

(床呂) どうもありがとうございました。原島先生、示唆に富んだコメントをどうもありがとうございました。

それでは、北山先生、よろしく願います。北山晴一先生は立教大学の社会デザイン学をご専攻ということです。そして、化粧文化研究者ネットワークを主宰されていて、そうした観点からのコメントがいただけるのではないかと思います。

北山 晴一（立教大学）

ただ今ご紹介にあずかりました、北山と申します。私の専門ということで、いま、社会デザイン学というご紹介がありました、では、社会デザイン学とは何か。皆さんすぐに疑問に思われたことでしょう。社会デザイン学は今日のお話そのものが社会デザインと違ってよいような学問です。人の日常的な生身の生き方に関わる問題と、社会の仕組みとがどう関わっているかということの研究し、実践に生かすということが目的なのです。

今日お話を伺っていて、前半の部分も非常に興味深かったのですが、今日私が呼ばれたのは多分、後半の吉田ゆか子さん、西井涼子さんの発表部分についてなのかなということ、多分そちらの仮面やヴェールに関する話を中心にコメントすることになると思います。お話が非常に面白くて、私もそれに聞きほれてしまいました。で、メモを取るということに気を



取られてしまい、何をコメントしたらよいのか混乱しています。

吉田さんの話も、西井さんの話も、私が普段考えていることに直接関わってくる事柄なのです。「これはどうかな」「あれはどうかな」とお話を伺いながら自問自答していると、こちらが疑問に思うというようなことについて、すぐにその後でご自身でそれなりの回答を出されてきました。いまさら私がこれにコメントするのはおこがましいように思えてきました。

先ほど原島先生から『顔の百科事典』の紹介がありました。私も編集委員のひとりとして、第五章の部分を担当しました。

私が担当した第五章は、「顔の社会学」の「顔と社会」というところでした。他の皆さん専門家の書かれている章を見ると、この章は明らかに違うなと思われるはずですが。

先ほど、顔は普遍であり、多様であるという話を原島さんはされた。それから、顔は関係性の中にあるという話もされた。まったくその通りだ、と私も考えていることです。

しかし、顔の話をする場合、普遍か多様性かということだけではなく、同時に、実は顔は唯一性の象徴だということも忘れてはなりません。それぞれの人が持っている顔は、この世で掛け替えのない、また昨日と今日とでも異なる、そういう唯一性に支えられているものなのです。顔の普遍性、多様性と唯一性とは矛盾するものではまったくなく、唯一性がなかったら、多様性もない。唯一性がなかったら、実は普遍性もあり得ない。そういうものとして私は顔を考えています。

#1

今日は、吉田さん、西井さんの発表へのコメントということで、さきほど慌てて、「顔、仮面、ヴェール、顔隠し、化粧？」というパワポを作ったのですが、まず、仮面です。ここにも「顔隠し」と書きましたが、日本では「仮面」と言うと、仮の面（つら）と書きますが、

面は日本では古来「おもて」と読んできた。つまり顔は自分のアイデンティティーを外側に見せる部位なのですが、実はアイデンティティーというのは、他者がいて初めて確認され得るものです。他の人がいないところで「アイデンティティー」という言葉自体が意味を成さない。このことが非常に重要なことと思うのです。

#2

仮面はたしかに仮の顔と書きますが、仮の顔というのは存在しない。先ほどバリ島の仮面劇の話で言うと、仮面をかぶった時点でそれはその人になる、という話をされた。仮面をかぶった人がいて、仮面の後ろ側でその人が何かしているというのではなくて、一体化する。この点がものすごく重要性を持っているのです。

文化人類学の深作光貞さんが、次のようなことを言われていた。「仮面をかぶることにより、人は自己であると同時に自分以外の別の存在ともなるので、自己と自己以外のものとの重複がおこり、両者の交流が仮面によって可能になる。したがって、仮面の「仮」とは、自己以外の存在のことであり、本来の自己の顔が仮の顔より優先するということではない」と。深作さんのこのことばを私なりに敷衍すれば、仮面をかぶる、かぶらないにかかわらず、私たちは一回限りの顔を持つてそこに在るということでもあります。その都度その都度、その瞬間その瞬間、私たちの顔というのは動いていき、それを固定化して考えることはできません。その都度、その瞬間の顔が自分の顔だし、それ以外に顔の在り様がない。と、同時に自分の顔は固定化しているということについては、私たちは我慢できない。だから、時々「ほんとの自分」「ほんとの顔」を思い描いてしまう。何とかしてそんな顔を変えたいということと、化粧や美容整形を願う気持ちも出てくるということとです。

じつは、ここで言っておきたいことは、このように私たちは自分の顔を自分でコントロー

ルし調整できる自由を持っているということ。建前の自由かもしれないけれども、自由を持っている。ところが、この自由も、消費社会という枠組みの中では自分の意思だけで自分の顔を押し通すということができない、そういう条件下にある。このことも非常に重要な事実なのです。それで、最近話題になっている幾つかの話をしていきたいと思えます。

#618

顔隠しの例として、まず、イスラームのヴェールの話をします。今日は西井さんの話を非常に面白く聞きました。私がスライドでお見せしているのは、いま話題になっているイスラーム国の戦闘員たちの姿です。ヴェールというと女性を想像しがちですが、ご覧のように男性も顔がある程度隠しています。こういう人たちです。顔を出している人ももちろんいますが、出し方も、髪の毛の部分は隠すという形なのです。これらの「顔隠し」がどういう機能を持っているかということは、女性の場合とはまた別の分析が必要でしょう。

#9

ここで余談ですが、車は全てトヨタです。驚いてしまいます。多分いろいろな援助で供与されたものが、こんなふうに転用・流用されてしまったのだと思います。

#10

これが女性の顔隠しの例です。これはヒジャブというものなのかな。ヴェールだけでなく眼鏡、サングラスも掛けているわけです。本当に外からは顔の識別ができないような例です。

#11

三人の女性が写っていますが、これはニカブと呼ばれるヴェールの例です。出ているのは目だけです。目で男を射殺すという言葉がありますが、まさしくそのようにも取れます。が、基本的には隠すのが目的です。ただ、隠しながら見せているのか、と言われれば判断の難しいところです。

#13

これもヒジャブではなくて、ニカブの例です。体全体もマスクの延長として覆ってしまうというもののなのです。これはイエメンの女性で、お医者さんです。

#14

次のスライドはネットにあるものなので、どこかでご覧になった方もいらっしゃるかもしれませんが、こういう非常にブランドものらしいバッグを提げているニカブの女性もいます。

#15

これはアフガニスタンの女性。ブルカというもので身体全体を完璧に覆っています。そこそそミツバチを飼っている人のような感じで目も覆われている。

#16

これはイスラームのヴェールが何種類かあるということでお見せしています。ヒジャブ、ニカブ、ブルカ、こんなふうに異なっていますが、基本的な部位は覆ってしまいます。



#17

さて、みなさんは、このスライドをどうご覧になりますか。“HIJAB OUR RIGHT”と書いてありますね。先ほど西井さんからイスラームの復興運動の話が出ましたが、それは、いろいろなところで起きています。このスライドは多分、英語圏でのデモだと思うのですが、カナダの例えばケベック州でもこういう形の運動が結構あります。

#21

ヒジャブ、ヴェールは権利だということですが、ここで「選択の権利と自由について」ということで、ぜひ考えてもらいたいと思います。スライドを幾つかお見せします。

#22

まず、このスライド「公的空間、とりわけ学校・官公庁でのヴェールの扱い」です。これはフランスで数年前に、先ほど「公的空間」という言葉が使われましたが、公的空間でのヴェールの扱いをめぐって、法律で禁止するということをやりました。これは、身体表象とどうか、自分の身なりその他について法律で禁止するのはどういうものかと、非常に批判がありました。でも、なぜこういう法律ができたかということも、ある程度私には分かるのです。

宗教と政治とを分けること、政教分離ということをフランスは二〇世紀初め一九〇五年に国家的な理念として選択した。いかに、学校内、つまり公共空間での平和を維持するかというこことやってきたわけです。それぞれの人が宗教的なシンボルを顕示的にこれ見よがしに出したらどうなるか、学校空間の平穏など保たれない、ということこの一〇〇年間やってきた。長い間緩やかな不文律として、ある意味では合意形成として成立していたのです。で



すが、最近、合意形成のレベルではなく、もつと熾烈なシンボル戦争になって、最終的には安全の維持のためにといいことでこんな法律ができてしまった。しかしこうした法律による禁止に対する批判も強いものです。文化的多様性尊重なのか、それとも公的空間の平和の維持、安全の維持なのか、境界線をどこに引くかというのは非常に難しい状態にあるということなのです。

24

ここで、身体表象の自由について、選択の自由と権利は自明のものか、ということについておさらいをしておきたいと思います。これは、全然自明ではなく、獲得されたものです。もともとは、身体表象というのは共同体的のものであって、個人に選択の自由はなかった。私たちは、そうした自由をいつから手に入れたのか。

それからもう一つ大事なことは、私が四番目に挙げた、「それは真に選択の自由であり権利であるのか」ということです。一見自由であるのだけれど、私たちは、今度は、さまざまな身体のコントロールを自ら進んで受け入れてしまう環境にある。私たちの消費社会の環境、状況なわけです。それも非常に重要だと思っております。

26

先ほどのデモのスライドでは、「HUBB OUR RIGHT」と掲げられていたけれど、ヒジャブを拒否する自由のない社会で、権利を云々すること自体が無理な話だと思えます。ところが、次にお話するように、身体表象の自由が認められているにも関わらず、自ら顔隠しを行う現実がある。以下、身体表象の自由を顔隠しの事実から考え直してみたいと思います。日本の話です。

27

先ほど来、多くの方が言及されていた村澤さんが『顔の文化誌』の中で、日本の化粧史上の特色を二つ挙げています。

ひとつは、日本では、奈良時代以降約一〇〇〇年にわたってアクセサリーが使われなくなったこと。もう一つは、顔隠しの文化です。顔隠しの文化は、眉化粧として伝統化されたということです。日本では、大人になるときに前髪を上げて成人の印にしたのですが、前髪を上げると額が露出する、ところが眉は顔の中で表情を非常に明解に出す部位である、それは社会生活上の支障となりかねない、というわけで眉をそって表情を消したということです。だから、髪上げと眉剃りの両方合わせて顔隠しを行ったと村澤さんは言っていました。これは大変な発見だと思います。しかし、村澤さんがすごいのは、そうした日本の顔隠しの文化が今、どうなっているかを調べたことにあります。『顔の文化誌』によれば、現代の顔隠しは、徹底的に額を隠す、つまり大人になっても前髪を上げない習慣として残っている、ということでした（額を出していたひとは、女性で一一％、男性でも二〇％でしかなかったという調査結果）。

28

これは今日も来ていらっしやいますが、浅沼小優さんという方が「織研 plus」（二〇一五年一月一日）というブログで、現代の「顔隠し」について書いています*。

村澤さんが調べたのは一九八七年のことでしたが、浅沼さんは、いま現在の状況について報告しています。アジアでは日本、韓国、中国、西欧諸国からは英国、米国、ドイツ、イタリア、フランスの計八カ国について調べています。調査法など詳細は省きますが、アジア三カ国ではそろって前髪ありの髪型が優勢。日本はその中でもっともスコアが高く

* <http://www.senken.co.jp/report/masked-japanese-women/>

(八三%)、中国ではほぼ半々に近い状況(五五%)。西欧諸国では反対に前髪なしが優勢だったそうです。とはいえ米国やイタリアでは「あり」と「なし」が拮抗しています(四七%と四五%)。ドイツとフランスの前髪率はとても低位(三三%、三〇%)にありほぼ韓国(七一%)と反転している比率だったそうです。だから、非常に文化的な差があるということなのです。それが何に起因するかについても考えなければいけないでしょう。

#29-30

日本の顔隠し状況が実際どうなっているのか、浅沼さんのブログにある幾つかの画像だけをお見せして、私の話をおしまいにしたいと思います。

三月下旬、地下鉄の車内で見かけた光景です。「目の前の座席全体を見渡すと、(中略)七人中六人がマスクを着け、みなうつむき加減でスマホを操作中。そのため顔前面に長い前髪が垂れ下がり、顔面がまったく見えない状態なのでした。おまけにメガネのせいで露出面積がさらに減少しているひとも。」

こういう感じです。風邪や花粉のシーズンは当然あるのですが、それが非常に大きな広がりを見せていて、こういう格好をすると、「心地よい」という言葉が先ほどありましたが、顔隠しにはまってしまうのです。

顔をしっかりと出して自己を表現する自由が認められているにも関わらず、逆に顔を隠して生活するひとがこんなにも存在する。この事実をどう解釈するのか。イスラーム系の女性の掲げる“HJAB OUR RIGHT”と、日本の顔隠しの状況、どっちがどのように交錯しているのか。今後の課題かと思えます。

36

さて、最後に顔についてのまとめ的なことをすこしお許し下さい。まず、顔には自らを他に向かつてアイデンティファイする力が備わっていること。この力は、自らが望むと望まざるとにかかわらず強大で、そのために顔を隠すということもある。この強大な力をコントロールするノウハウがじつは化粧行為の中に蓄積されている。

顔や身体をどう扱い、どう生きていくのか。そこに社会や文化、美的感覚に関わる地域性、独自性を見出す考え方もあろう。

37

以下は参考映像ということです。資生堂がパリの日本文化会館で震災への世界的なサポートに対する感謝の念を込めてということで、「美しい日本の笑顔」という写真展の画像です。たしかに多くの日本人が共感する笑顔だと思えます。

38

それから、もう一つはこれです。これは「戦争反対 銀座大行進」というポスターの画像です。前髪処理がどうなっているかということを見ていただきたいと思うのです。

39

最後に前髪率の低かったフランス女性の画像です。フランスのエリゼ宮（大統領府）の料理人になったという人のインタビュー記事からです。この人のおでこ、原島さんと同じように完璧に出ていますね。



美しい日本の笑顔
ヘア・メーカーキャップ 大久保紀子 カメラマン 金澤正人



(床呂) 北山先生、どうもありがとうございます。もうコメントというよりも、これ自体がもう一人のご報告者の報告のような、大変密度の濃いコメントありがとうございます。

それでは、最後のコメントになります。日本女子大学の金沢創先生です。心理学の立場からということで、今回一言だけ申しますと、一応、主催者はA A研の基幹研究人類学班ということになっていますが、実質的には金沢さん、山口さんと相談させていただいてということですので、内容的にはほぼ企画者というお立場からということになるかと思えます。それでは、金沢先生よろしく願います。

金沢 創 (日本女子大学)

今日は聞いていまして、すごく面白くて、普段こういうのは何かスライドなどを用意するのですが、そういう時間もなくて、ずっと聞きほれたというか。やはり中身をずっと聞いてコメントしたいなということで、申し訳ないのですがスライドなしで話させていただきます。時間をもつたいたないので、でも、ちゃんと話します。

舞台裏というわけでもないのですが、冒頭にありましたように、このシンポジウムは、もともとは研究費のグループをつくらうと、そういうところから始まったところがあります。しかし、今日はこうやって集まって話を聞いてみると、そんなことは関係なく、大変面白かったわけです。そういう意味では、別に研究費が通らうが通るまいが、こういう集まりはどんどんやっていきたいと思えます。

面白いというのはいろいろな意味がありますが、多分ここに来られている先生方、もしくはいろいろな立場の方がおられると思うのですが、それぞれみんな現場があると思えます。



大まかに言って、例えば心理学と文化人類学というグループ、もしくは、化粧など、そういう企業におられる方もいるかもしれません。多分、今日の話は、それぞれの現場での明日からの活動のヒントがたくさん転がっていたように思うのです。少なくとも私は心理学の研究をしています。今日の文化人類学の話は、これはこうやったら研究、こういう実験をやったら面白いなど、そういうものが満載といえますか、大変参考になりました。

その中で一つキーワードを挙げるとすると、「ユニバーサリティー（普遍性）」という言葉が、今日も原島先生も出されていましたし、何度も出ていましたし、カルダラさんの話も結局この表情、ユニバーサリティーを実験的に批判するところからスタートしています。心理学も、エクマンでも表情の共通性のようなところを、「でも、そうではないよね」というところからスタートしており、これは一つ大きくキーワードだろうと思うわけです。それは、心理学という学問と文化人類学という学問の違いということとすごく関係していると思うのです。

実はといいますか、最初から時々出てきましたが、床呂さんと僕は昔からの知り合いといえますか、よく話をしていて、その当時からもう既に心理学と文化人類学の違う学問をやっていたのですが、それで結構、友達になってざつくばらんに雑談をする中で、でもその学問の二つの違いをいつも感じながらよく雑談していたということを思い出します。

原島先生は、すごくコントロールされたものから普遍的なものに至る心理学と、そうではなく、ありのままから普遍性か、多様性に至るのか、どちらだったか言葉は忘れましたが、ありのままからアプローチする文化人類学という対比をされました。ある意味で言うと、心理学というのは、個別の非常にミクロなものから普遍的などどこにでも通用するものに至ろうとする学問であり、文化人類学というのは、どこにでも共通している社会、マクロなところから非常にミクロなところに通じるものに至ろうとするアプローチという意味でも、

逆なのかなということも思います。

つまり、「ユニバーサリティー」という言葉も、ではその反対語は何なのかというのもよく分からなくて、「多様性」なのか、「唯一性」なのか、「固有性」というものなのか、これをどう考えるかというところは、今日二つの前半と後半で原島先生が文化の違いが面白いと言われていましたが、そこ自体も僕にとっては非常に刺激的でした。

もう一つは、キーワードとして、山口の研究は僕も一緒にやっているのですが、ネイチャーといえますか、「本質」という言葉を言ったような気がします。これは、カルダラさんも、要するに文化というものが、認知やデジタルワールドをシェイプするという言い方をされたと思うのです。そのシェイプしていく中で、もともと何なのかという。ネイチャーは、氏が育ちかという言い方をしますが、ユニバーサリティーとも少し関係しますが、一番大事なものの、どこにでも通じるもの、それを探るのが科学だと思っっているのですが、そういう中でやはり本質からズレていくところに面白みを見いだす学問と、何か唯一絶対的なものとは何なのだろうかという学問の対比があると思うのです。とはいえ、文化人類学にしても本質を探しているという面もあります。そういう意味では、この二つの違いと共通性のようなものに大変感銘を受けました。

時間もあまりないですが、僕が拾い出したトピック、キーテーマ、研究の内容で言うと、三つほどぱつと挙げてみたいのですが。一つは、目と口というのは何度も出てきたと思うのです。やはり目と口をどう見るか。顔にとって目と口というのは何なのだろうという。口というのは言葉をしゃべるわけです。でも、快・不快の表情の一番重要な違いであったりします。それを、結局、顔というのはコミュニケーションするために用いている。だから、ここでは全然語られませんが、言語の違いもしくはコミュニケーションスタイルの違いというのは、顔をどう見ているかということとすごく関係しているのだろうということも一

つ感じました。

それから、それと関連はしていますが、顔を見るということ、もしくは顔を見られるというこの意味です。そのとき、僕たちは何を読み取るうとしているのだろうということはずごく気になります。心理学では眼球運動を測定する。吉田さんの話で言うと、面白かったのは、大臣の仮面は目がかーっとしていて見開いているわけですが、王様の仮面はうつろで、どこを見ているか分からない。見ることができるのは特権をもつものであると同時に関わりをもっているということで、その力あるものにそこに権力関係があるということでしょうか。あるいは王様はそこを超越しているということなのでしょう。そういうところを、では見るといのは何なのだろうなということも考えさせられました。

最後に、では顔を見て、見られて、そこで顔と顔を突き合わせてやりとりされているものは一体何なのかというのが一番気になります。西井先生の話でしたか。死者は顔を覆う、それから顔を隠すことで安心するというのは、結局やりとりするものを遮断するということです。死者とはやりとりできないからなのか、やりとりしたら困るものがあるのか、そういうことが少し気になりました。やりとりされて、それを楽しいと言ったらいいか。あるいは「コミュニケーション」という言葉は、そういうやりとりしているものを指しているのかというそのあたりのことを考えながら、今日の話を持ち帰ってまた明日からの新しい実験を考えたいと思いました。以上です。

(床呂) 金沢さん、どうもありがとうございます。本日のシンポジウム全体を総括していただいたのと同時に、新しいヒントもたくさん頂いたような気がいたします。

V デイスクッション

(床呂) それで、いかがいたしました。せっかくなので、今日ぜひ会場にいらっしゃる皆さま方から今日のご報告、あるいは場合によっては先ほどのコメントーターの方に質問やコメントでも結構ですので、いかがでしょうか。ご質問・コメント等ある方。差し支えなければお名前等おっしゃっていただければと思います。よろしいでしょうか。では。

(Q1) 東京大学の高橋です。すごく楽しいお話をいっぱい聞いて、ありがとうございます。ちょっとドライな考え方をすると、これからのコミュニケーションというのは、結構顔を使わない状況が、もういくらでも入り込んでいくと思います。今日いろいろな先生のお話を伺えたので、その方々に、要はインターネット上で全く顔を使わないコミュニケーションがいくらでもある状況で、顔の価値がどう変わっていくのか。多分これは新学術の中でも考えていかなければいけないことだと思っております、その辺の話をぜひ伺いたいと思います。

では、金沢先生あたりに。どなたかに。

(床呂) では、どうしましょう。山口さん、お答えになりますか。では、まずは。

(山口) 顔を使わないコミュニケーションということで、例えばメールのやりとりを考えると、メールのやりとりではとんでもなく意図の食い違いがあります。顔というのは結局、コミュニケーションしたときに「これで大丈夫だったかな」「これでオーケーかな」と、自分の言っていることが相手に大丈夫かという確認をとるために必要なのではないでしょうか。メールでも、顔文字が出ると少しほっこりすることがあります。今の学生さんたち、若い人たちがいたら、LINEなどには、やたら絵や顔のマークがたくさん出てくるので、こうしたものがないと、言っていることがちゃんと伝わっているのか、これで相手はいいのかな、

という不安が出てくるのでしょうか。顔というのは、そんな役割があるのではないかと私は思います。どうでしょうか。

(床呂) 他のご報告者の先生方で、今の点。渡邊先生とかもし何か。

では、北山先生から挙手がありましたので。

(北山) 顔を使わないコミュニケーションの可能性は、ある意味ではあり得ると思うのです。ただし、それが人間社会における本当のコミュニケーションかとなってくると、これもまた難しい問題と思うのです。なぜかという点、顔を使わないコミュニケーションの場合、顔の持っている曖昧さや、システム化できないような側面が消えてしまつて、単なる情報だけがそっくり届けられる。そこに含まれていた、あるいはそれを覆っていた大事な何ものかが剥ぎ取られて伝達されてしまう。だから、ネット上でのいろいろな対立、抗争、けんかのようなのが起こるのだと思うのです。

言語以外のコミュニケーション。「コミュニケーション」というと言語となつてしまうのですが、ノンバーバルなコミュニケーションの要素は非常に重要なのに、それが伝わるのかどうかということです。例えば相手の顔が見えていたとしても、ネット上で、IT技術を使った形で見えるのと、そうではない生の顔とでは、まったく違う。曖昧性やファジーな部分があるかないかということだけではなく、それを超えた次元で、大きく違ってくると思つているのです。情報伝達イコールコミュニケーション、と考えるのは誤謬だと思います。

(床呂) では、原島先生。

(原島) 顔を研究している人間から見れば、顔は大切だと言いたいわけです。その立場からは、顔を隠すコミュニケーションなんておかしいと言いたいのですが、一方で、これだけむしろその逆の方向に動いているというのは、今日も議論があつたけれども、顔を隠すことは快適なのです。だからこそ、こういう形になっている。なぜ快適かというと、顔を見ると、

いろいろな葛藤がそこで生じるのです。それをなるべく避けたいというのがあって、一回避けてしまうと結構快適ではないかということになっているのではないかと思います。その部分をしっかりと考えないで「けしからん、けしからん」では何も解決しないということです。

気になるのは、われわれは顔を重要だと思っているのは、もしかしたら原体験が顔を見ることになっているのでそう言っているのです、原体験で顔を見なかった人は一体どうなるのか。われわれが言っているのは、単なるノスタルジアでしかないのではないかという気もしますがいかがでしょうか。

(床呂)

今の点、もし他のご報告者等から何かあれば。よろしいですか。

まだ若干お時間がありますので、他のご質問やコメント等、いかがでしょうか。せっかくの機会ですから。どうぞ。

(Q2)

所属としては日本顔学会、化粧文化研究者ネットワーク、そして資生堂というお化粧品

品の会社に属しています高野と申します。今日は先生方、ありがとうございます。本当に広範にわたるお話で、いろいろ考えることがございまして、一つコメントと、一つはお聞きしたいことというお話させていただきます。

今日は、山口先生やロベルト先生のお話の中からは、やはり顔というのが、形ではなく表現するものを読み取ろうとする、そこをとても強く感じました。吉田先生と西井先生のお話の中から感じましたのは、顔というのは、私も今まで「隠す」という言葉は、自分の顔を消すとかで、逆に近親者にとつて個を深めるものと認識していたのですが、今日お話を伺っている中で、やはり顔は隠しても表現しても、拡張するものだと感じました。仮面も表現の拡張ですし、隠すということも、自分のアイデンティティーを出したり、個というものを深める意味があるので、やはりどちらも拡張の意味があるのではないかということを感じました。皆さんはどのように思われるでしょうか。

あとは、そうした隠すと見せるという意味で、化粧は両面を持っていて、隠しながら見せることができるアクセサリーでもあると、そういうこともあらためて気付きました。そうした意味で、特にムスリムの女性たちにとって化粧がどういう意味を持っているのかというのがすごく気になりました。もしここで西井先生にコメントいただけるのであれば、お願いしたいと思います。

(西井) ありがとうございます。隠すというのが個を深めるというのは、確かにそのとおりだと思います。今日の事例でヴェールをかぶった女性たちは、やはり自分の宗教的な生活、宗教的な内面世界を、隠すというヴェールの中で実現していくという意識は、すごくあるのではないかと思います。

彼女たちの化粧ですが、例えばマストウロと先ほど言いました。男女が来て、女性だけの空間になるというときに、私も参加させてもらったのですが、ムスリム社会の話では、黒いヴェールの下にみんなすごく華やかな格好をしているというのは、よく聞かれるかもしれませんが、本当にやはりそうで、もうパーッと、すごく華やかな人たちがいて、ミャンマーから来たダツワ運動の人たちでしたが、彼女たちはすごく真っ赤な口紅を塗ったり、中にはすごくおしゃれをしています。

けれども、そういう女性が自分の夫のお父さんにも顔を見せたことがない。それは、お父さんかもしれない変な気を起こすかもしれないから、見せられない、そういう問題を起こしたくない。それは自分の罪になるから。イスラームから行くと、男性を誘惑するということになります。あのような場で語られることは、女性が顔を見せることが男性を誘惑することになる、だから罪になるのだというような言い方です。

彼女たちは、女性と自分の親族男性に見せていいのですが、そういう世界は、それはそれでものすごく楽しんでいるのです。おしゃれもしています。一方で、外では隠すことによつ

てコントロールするという面もあるのではないかと思います。

すみません。まだ考察が全然深められていないお答えで。

(床呂) ありがとうございます。他にいかがでしょうか。今日はせっかくスイスからロベルト・カルダラ先生もいらしていますので、ロベルト・カルダラ先生にご質問等あれば。先ほど渡邊先生に少し確認させていただきました。日本語でも渡邊先生が通訳をしていただけということなので、日本語でも結構ですし、もちろん英語で直接聞いていただいても結構です。特によろしいですか。

(西井) 渡邊先生が先ほど、何か時間があつたら。

(床呂) そうですね。ではせっかくですから、渡邊先生も一言、言い足りなかった点など、いろいろ。

(渡邊) あ、多分時間余らないだろうと思って、そう言っておいたのですが……。

先ほど高橋先生が言ったことに関して、そもそもわれわれは顔を定義していないので、定義が変わっても構わないと思っています。インターネットでのコミュニケーションに顔がないと言っているかという問題がある。先ほど原島先生が言われたように、ある人をイメージするときは顔を思い浮かべてしまうというのが、元からの認知的アーキテクチャとして備わっているのか、あるいはわれわれの経験上そうなっているだけで、インターネットでのコミュニケーションでは変わっていく可能性があるのか興味深いですね。それに関しての、*nature vs nurture*の話ですが、もともとわれわれは顔を基準にして他人というものを定義するように生得的になっているのか。その意味で、自分の奥さんや子どもからeメールをもらったら、多分顔が思い浮かぶのですが、そういうのがなくなっていく時代があるかなあと。あとは、例えば盲人にとって顔とは何なのだろうという議論があってもいいのかなという気がしてはいます。

(床呂) ありがとうございます。いかがでしょうか。あと、お一人、お二人ぐらいですか。短いコメントの話や質問は可能かと思えます。いかがですか。

もしないということでしたら、あるいは報告者の方、コメンテーターの方でまだ言い足りないという方も恐らくいらっしゃるのではないかとも思いますが。山口先生、いかがですか。急に振ってすみません。

(山口) そうですね。講演では、自分の心理学の研究を中心に話ししました。それとは別に、冒頭に床呂先生に紹介していただいたように、著書の中では心理学を離れて顔というのは何かなとつらつら考えてきたこともありましたので、そういう観点からすると、今日の文化人類学のお話は、とても興味深かったです。

仮面とヴェールは、特に興味深い題材です。私は摂食障害の話をしました。思春期の女性にとって、見られることというのはすごく過剰でストレスフルなところがあると思うのです。それは男女と比べると、女性がそのように見られる立場であることと、心理学的な観点からいうとやはりどちらかというところと女性の方が、男性と比べると共感性が強く、過敏に反応するところがあると思うのです。それがもしプスツと切ることができたら、とても安心というのにはあり得ることなのかなと思いました。

実は今までヴェールについて、そのように考えたことが一度もなく、特に日本では、顔を隠すということが、どちらかというとネガティブなイメージがとても強かったこともありまして、今日は顔を隠すことの積極的な意味を初めて考えさせていただけの機会だったと思います。

また、それに似た話として、メディアの顔を見ても恥ずかしくないというのもあります。それから本日話題になった話の中でいいますと、ヴェールをするとすごく楽だったこと、死者の顔を覆うと、こちらが守られる気持ちになるということ。それらは生身の顔の持つ力に

ついて語っているようでもあります。一体、生身の顔は何かというと、私たちの顔というのは身体の一部で、身体の一部はやはりリアルな肌なのです。リアルな顔は、なにもつけずにいるということは、裸みたいなものではないでしょうか。その裸を隠すという意味で、ヴェールで隠したり、布を隠したりすることもあるし、化粧して加工したりすることにもつながります。また私たちは生身の体を見るように、テレビに映る自分の顔を見ると、ちよつと老化したところばかり気になったり、自分の生身を見せつけられる気分にもなるのかと思います。実に今日の話題は、いろいろな話が展開して、かつ共通する話もあり、実に面白いと思えました。

話がまとまりがない感じになりましたが、そんなところを考えさせていただきました。ありがとうございます。

(床呂) どうもありがとうございます。いかがでしょうか。他の方、まだいらっしゃったら、あとお一人ぐらいになります。一番後ろの方。

(Q3) 松蔭大学の川添と申します。化粧文化研究会のメンバーです。私は美容整形の研究をしまして、美容整形の患者さんを見てみると顔の非常に細かい部分にこだわりがあるのですが、でもその割に手術したというのは意外とすぐ忘れてしまう、前の顔は簡単に忘れてしまふという、面白いところがありました。

今回のご発表の中でとても関心を持った部分が、バリ島の吉田先生のご発表なのですが、バリ島で結構醜い顔なども、仮面を笑うジョークのたねにするというところで、笑いというのは意外と規範やいろいろなものを笑い飛ばすというか、笑うことでそれまでの価値、本来の現行の価値やそういうものを笑い飛ばすような面があるのではないかと思うのですが。この辺の仮面で、ちよつと醜いとか、そのような顔を笑うというところを、もう少し何かそういう点があれば教えていただきたいと思えます。

(吉田) ありがとうございます。それに関しては、一九八〇年代ぐらいの先行研究だと、要は、基本的には病気など、われわれにとって怖いものを笑いものにして、その怖さから逃れるというか、ある種の厄払い、そういう効果があるのではないかと分析されています。でも、それは少し医学が発展していなくて、こういう口も治らなかつた時代だし、ハンセン病ももつと患者が多くて、異形の顔がいっぱいいた時代で、今の時代にこれを笑えるというのはもしかしたらちよつと感覚が違うかなと思います。

私がおもうには、一つは、平民の顔にばかり醜い顔の仮面を使うのですが、観客もほとんど八割ぐらいは平民なのです。ということは、他者の顔を笑っている、他人の顔を笑いものにしていくというより、自分たちの至らなさというか、村人全体の、王様のようにはいかない不完全なわれわれを笑おうというような、自分に対して笑っているようなところがあるのではないか。そう思うと、顔だけではなくて、しゃべりなど、全部くつついてくる不完全さというか、何か良くなさ、逸脱する楽しさであったり、ハンサムな人がやってくるよりも、変だけれども面白い顔だから言えるようなこともあるのです。そういう躍動感のようなどころにつながっているのかなと思います。

(床呂) どうもありがとうございます。まだご質問やコメント等ある方もいらっしゃるかもしれませんが、一応、予定時間を五分ほど既に上回っていますので、本日のシンポジウムはこれにておしまいにさせていただきますと思います。

最後に閉会のごあいさつだけ、ほんの一言、西井からまたさせていただきます。では西井さん、願います。

(西井) 今日は長時間にわたり、とても面白いデイスカッションもでき、本当にありがとうございました。立ち上げシンポジウムということですので、またぜひ機会がありましたら、こういう機会を続けていければと思います。本当に今日はお疲れさまでした(拍手)。

この後、この近くに懇親会の場を取ってはいますので、できましたらそこで「顔」を突き合わせて、また皆さまとお話ができればと思います。もし懇親会に参加できる方がいらっしやいましたら、もう少しだけここで待っていただければと思います。では、ありがとうございました。

基幹研究「人類学におけるミクローマクロ系の連関」とは

人類学はある時期まで、小規模社会のフィールドワークを活動の中心としてきた。しかし近年、上位の政治社会にあたる国民国家や「近代世界システム」をはじめ、トランスナショナルな規模にまたがる社会・文化圏、さらにはグローバルな地球環境まで視野に入れたマクロ・パースペクティヴへの関心が高まってきた。また他方では、その対極にむかう方向性として、ハビトゥス、熟練と暗黙知、アフオーダンス、社会空間など個々人の身体性を考察の起点とした間身体的実践、すなわちミクロ・パースペクティヴを軸とした問題系も同時に浮上しつつある。こうした国内外の研究動向を前に、人類学的思考として現在求められているのは、地域別の研究や個別の主題に基づく調査研究を超えた次元での、新たな概念化と理論化の試みである。本基幹研究は、その点において先導的な役割を担うことを目標とする。具体的には、個人と社会、構造とエージェンシーといった二項対立の構図をこえた地点から、身体や実践の主題をめぐるミクロ領域での研究と、広域におよぶ空間移動や生物進化のダイナミクスまで射程に入れたマクロな時間軸に基づく研究との、接合ないし理論構築にかかわる研究成果の創生を企図するものである。

● 研究主題のさらなる焦点化と先導化にむけて

—〈情動 *affectus*〉と〈社会的なもの *the social*〉の交叉をめぐる臨地・理論研究
(二〇一三年六月追記)

過去三年にわたる共同研究活動を通じ、本基幹研究では、ミクローマクロ系の連関をめぐる人類学的考察にとっての今日的な諸主題が、フィールドで感知される人びとの情動と、当

の情動のもとで流動的に編成される社会的なものとの、交叉の様態に収斂するのではないかの視座を得た。

情動とは、個体の怒りや悲しみといった通常の個人の感情に限定されず、意識や主体を超えて、フィールドに共存する身体が互いに影響しあうことで生み出される反響関係に焦点化するための概念である。その関係は、人と人の関係のみではなく、人やもの・環境など様々な関連性のプロセスを含む。主体やエージェントといった人間の意志を起点としてものごとを捉えていく方向性とは逆に、ものごとくに巻き込まれていく受動性とそこから浮かび上がる生の現実を照射することを目指しているといえよう。それは、スピノザやドゥルーズに影響を受けた近年の情動論的転回 (affective turn)、「身体性的人类学」、アクター・ネットワーク論などの動向とも共振する理論的方向性をもつものといえる。

複数的な情動の連鎖をつうじて、人びとの想像力に胚胎するモラルの次元にまで視野を展げてみよう。社会的なものは、これまで「市場外要素」のような消極的な価値づけを施されることも確かにあった。しかし、グローバル化(グローバル経済、グローバル内戦……)の今日、社会的なものもつ創発的な価値が、経済的なもの、あるいは政治的なものとの対照において、人類学の分野でもひとときわ光彩をはなつ主題として再浮上しつつあることは示唆的であろう。

今世紀に入り、人間の生が不確実性や偶然性のただなかで営まれていることを今ほど痛切に感じることはない。そうした時代状況のもとで、私たちは己れの生をなおも継続していかねばならない。これまで、人間の生をめぐる思考は、不確実性をそれ自体として見据えることなく、確かに実在しているように見えるものを抛りどころとして展開される傾向があった。しかし、不確実性を「リスク」と「チャンス」の計算式によって覆い隠したままでは、生の現在性に真摯に対峙する学的営為の芽は失われてしまうだろう。「感情と構造」のよう

な秩序志向の概念対立としてではなく、今日の世界各地で生じつつある未知の社会的胎動を感受するために、そして人類学の内部にいままた新たなアクチュアリティを回復させるために、情動と社会的なものの変化する現場⇨フィールドでの探究を、本基幹研究のさらなる先導的課題として、ここに明示する次第である。

【参考】

西井涼子『情動のエスノグラフィ』京都大学学術出版会、二〇一三年。

真島一郎「モース・エコロジック」『現代思想』三九（一六）、二〇一一年。

床呂郁哉・河合香吏編『もの人類学』京都大学学術出版会、二〇一一年。

三尾裕子・床呂郁哉編『グローバリゼーションズ』弘文堂、二〇一二年。

カイエ、アラン『功利的理性批判―民主主義・贈与・共同体』以文社、二〇一一年。

菅原和孝『感情の猿⇨人』弘文堂、二〇〇二年。

デュピユイ、ジャン⇨ピエール『ツナミの小形而上学』岩波書店、二〇一一年。

ロバーツ、マイケル「ナシヨナリスト研究における情動と人」『思想』八三三、一九九三年。

基幹研究「人類学におけるミクロマクロ系の連関」

二〇一五年度 公開シンポジウム(二〇一五年十二月二三日)

床呂郁哉編「顔と身体表現に基づく異文化理解」

編集…床呂郁哉

発行…東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

基幹研究「人類学におけるミクロマクロ系の連関」

〒一八三―八五三四 東京都府中市朝日町三―二―一

TEL 〇四二―三三〇―五六〇〇

FAX 〇四二―三三〇―五六一〇

ホームページ <http://www.aatlts.ac.jp/kikanjinrui/>

発行…二〇一六年三月一五日

表紙デザイン…中村恭子

印刷・製本…株式会社ワードオン

〒三三五―〇〇〇四 埼玉県蕨市中央七―五六―三